ポケットモンスター　ADVENCEMENT

ノウレッジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　ＡＤＶＥＮＣＥＭＥＮＴ

【Ｎコード】
Ｎ１３９２Ｔ

【作者名】
ノウレッジ

【あらすじ】
雨の中、とあるキャラバンが襲われ、全滅した。しかし、実は少年がたった１人だけ生き残っていた。少年は復讐を胸に旅に出た。これは作者オリジナルの『グレップ地方』にて巻き起こる冒険譚である。
青年となった少年は、復讐の果てにどのような答えを見つけるのか。

プロローグ：雨中の決意（前書き）

初めまして、ノウレッジと申します。

初投稿なので、どうか温かい目で見守っていて下さい。

不定期更新になりますが、（月並みですが）頑張ります。

それでは、プロローグのスタートです。

プロローグ：雨中の決意

プロローグ：雨の中の決意

ザー
ザーザーザー
ザーザーザーザーザー

降り注ぐ雨の音で目を覚ました。

「う……っ」

目が、霞む……。

冷たい……。
痛い。

皆は……。

転倒した馬車の荷台から黒髪の少年が這い出て来た。十歳ぐらいだろうか。
あちらこちらに傷があるが、致命傷ではない。

あちらこちらに転がっている荷馬車。呼吸を止めた馬車馬のポニータ。
二度と会えない、友達や家族。

「お父さん……」
「お母さん……」
「おじさん……」
「ねぇ、返事してよ……」
「お爺ちゃん……」
「お姉さん……」
「隊長さん……」
「リック……」
「ヨウスケ……」
「ボクだよ、キョウだよ……っ」
「起きてよ……」
「……」
「独りにしないでよ……」

時に、揺すった。
時に、囁いた。
時に、探した。

けれども、誰も、何をしても、

目を開けてはくれなかった。

「う　　あ

うぅ　あぁ　う

い　　あぁ

うぁ　おぁ」

わ

少年は必死に泣くのを堪えた。
けれども、涙も感情も止まるはずも無かった。

「う、うわあああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁんっ！　うわあああ

家族が死んだ。
ポケモンも死んだ。
仲間も死んだ。
友達も死んだ。
荷物も盗られた。
希望も無くなった。
夢も無くなった。
明日も奪われた。
心を砕かれた。
何も、残ってない。

いや、１つだけ残っているモノがあった。

憎い。

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い！
全てを奪ったアイツ等が憎い！
全てを壊したアイツ等が憎い！
全てを殺したアイツ等が憎い！

復讐してやる！
同じ目に合わせてやる！
殲滅してやる！
生まれて来た事を後悔させてやる！

憎悪の奔流。それが少年の中に生まれた。
こんなにも激しい感情が自分の中にあるとは知らなかった。
仇討ち。
それがこの日からの少年の生きる目標となった。

腰のモンスターボールを取り出す。
中から出て来たのは頭に植物の苗が生えたカメ型のポケモンと、黄色と黒の、小さな電気ネズミ。

「ナエトル、ピチュー。ごめんね、たった今から、ボクの、いや俺の復讐に付き合ってもらうよ」
『エェルゥッ』
『ピッチュ！』

現状を理解した2匹のポケモンは、怒ったようにも悲しんだようにも見えた。

けれども、敵を討ちたいという意思は伝わった。

まずは仲間を増やそう。

その為に、1人と2匹は、草むらから出て来た紫のサソリ型のポケモン、スコルピを捕まえる事にした。

これが、この物語の主人公、御鏡（みかがみ）　響（きょう）の冒険の始まりの日だった。

TO　BE　CONTINUED

プロローグ：雨中の決意（後書き）

物語は数年後、主人公が青年と呼べるまでに成長したところから再開する。

キョウ「俺はとある町でとある人物と待ち合わせをしていた」

？？？「おーい、キョウ～」

キョウ「ところが俺は、とあるゴタゴタに首を突っ込んでしまう」

？？？「性分なのは分かるけど、ちょっとは自重してよ！」

キョウ「次回、ポケットモンスター　ＡＤＶＡＮＣＥＭＥＮＴ　第１話『キョウという人物』。みんなもポケモン、ゲットだぜ」

？？？「テンション上げようよ……」

第1話：キョウという人物（前書き）

2話目の投稿です。
今回は主人公の人柄とヒロイン明かしです。
では、スタート。

第1話：キョウという人物

グレップ地方、という地方がある。複数種類の地方に住むポケモンが多く生息し、更に世界中から多くの強者達が集うというトレーナーにとってはここに来る事自体が至高とも言える場所。

実際はそんな事は無いのだが、ともあれ、沢山のポケモンと沢山の強いトレーナーがいるのは事実だ。

場所は地球で言うならばヨーロッパの辺りか。カントーやシンオウは勿論、イッシュなんかとも遠く離れている地方だ。

このシリーズはこの地方を中心に巻き起こる波乱万丈な物語を綴った物である。

とある道路の真ん中でバトルが行われている。息も上がって無く、傷も付いていない所を見ると、始まったばかりの様だ。

道路、といってもアスファルトで舗装された訳では無く、ただ単に草木を取り除き人が通りやすくしただけの獣道みたいな物だ。自然（ポケモン）との共存を望む以上、こういう形は必然と言える。

片方のトレーナーは“かるがもポケモン”のカモネギと、“水魚

ポケモン”のヌオーを出している。見た目は明らかに短パン小僧だ。
もう片方のトレーナーは“大陸ポケモン”のドダイトスと“鼠ポケモン”のライチュウだ。青年で、黒い長髪にライトブラウンのトレンチコートを着用しており、背中のバッグには木刀が括り付けられている。

「カモネギは“エアスラッシュ”、ヌオーは“マッドショット”？」

バトルの開始と共にカモネギは風の塊を剣の様に振り下ろし、ヌオーは泥を砲弾状にして吐き出した。

ズドォオンッ！

2体の技は明らかに命中した。しかし、着弾の煙が晴れると、そこにはピンピンしたドダイトスとライチュウがいた。

「効いてない！？」
「終わりか？」

青年が静かに言い放つ。感情を込めない言葉は、寧ろ冷たく感じられた。

「ドダイトス“リーフストーム”、ライチュウは“放電”？」

ドダイトスが吠えると自身の周りに渦巻き状に葉が巻き上がり、渦の天辺が相手に向かう形で射出された。一発撃つ毎に威力が落ちる技だ。
ライチュウは周囲を構わずに高威力の雷を放つ。本来なら味方を巻き込む危険な技だが、地面タイプでもあるドダイトスには効果は無い。

ズガァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！

凄まじい爆発を引き起こし、煙が消えた時、カモネギとヌオーはひっくり返って目を回していた。だけでなく、トレーナーも５メートル程吹っ飛んでいた。

「て、てめぇ……。どんなイカサマしやがった……っ！」

起き上がった少年が青年に噛み付く。

青年は無感動に答える。

「何もしていないが」

確かに、イカサマの入る余地があったとは思えない。少年もそれは理解していた。つまりは負け惜しみなのだ。

「チッキショォオオオオオオオッ！」

ダッ、と少年は駆け出した。後には賞金の２８４円が残っていた。

「律義だな」

青年は感心した。

青年、御鏡（みかがみ）　響（きょう）はこの地方でも有数の猛者だ。有名ではないが……。

成熟した今、彼は負けた記憶が全く無い。

ポケモンを数多く所持し、1体1体のレベルが高い。だけで無く、様々な戦術（タクティス）を生み出しているのも強さの秘訣だ。

現在、とある町、アジサイシティにてキョウは待ち合わせをしている。

「遅いな……」

公園の時計を見て言う。待ち合わせの時間を過ぎた。１０分前行動が仇となったか。

自分の腕時計と同じ時を刻んでいるのだから、自分の時計が狂っているワケではなさそうだ。

そして思い出す。相手は時間に必ず間に合わない人だったと。

（長居を覚悟するか）

そう考えた。果たしてそれは杞憂だった。覚悟から1分、ようやく待ち合わせた相手が来たのだ。3分の遅刻だが、大目に見よう。

「おぉ～い、キョウ～」

「遅いぞ、エリス」

走ってやって来たのは、金髪碧眼の少女。

エリス・アインシュタイン。

スレンダーな身体で、地元の名家の娘らしいが、親が勝手に決めた婚約に反対して飛び出して来たらしい。

「良一（りょういち）と桃都子（もとこ）は？」
「2人なら行き先が違うからって、この間分かれたよ？」
リョウイチとモトコというのはエリスとの旅の仲間だ。キョウもその一員だったのだが、山に籠ると言って一月前に別れたのだ。
「じゃ、改めてひさしぶり！」
「ああ、ひさしぶり」
寡黙で表情の変化が余り無いキョウは静かに笑った。彼が表情を変えるのはエリスの前以外では殆ど無いというのは誰も知らない。
そして、エリスがキョウを気にかけているというのも本人だけの秘密だ。

———とあるハンバーガーショップ
「そんな事があったのか」
「そ！　結局リョウイチが折れてさ。もう大喧嘩だったよ」
キョウはエリスから自分と別れてからの一ヶ月間の出来事をハンバーガー片手に聞いていた。

「にしても、キョウ。お昼そんだけ？」
「元々大食らいでは無いからな」

キョウが注文したのはハンバーガー１つと牛乳１つ。エリスはチーズバーガー３つ、ポテト１つにコーラ１つ。身長が１８０センチ近くある彼にしては、いくら大食らいでは無くとも足りないのは明白だ。

ピン！とエリスは何かに感付く。

「キョウ、若しかしてお財布の中身……」
「……」

平然とした表情を本人は浮かべているつもりなのだろうが、頬を冷や汗が流れているのを、エリスは見逃さなかった。

仮にも彼は気になる男。細かい動作でも視界に入ってしまうのだ。

「もぅ、ちょっとはバトルして稼ぎなよ！　そんなんだからお財布の中身寂しいんだよ」
「確かに閑古鳥は鳴いてるな……」

キョウは窓の外を向きながら答えた。

「だが、俺は自分からバトルを仕掛けたくない。俺は自分の強さを知っている。俺が賞金目的でバトルをふっかければ、それはもうトレーナーでは無く賞金稼ぎだ」
「だからって、それで自分が貧しかったら問題じゃない……。理想じゃお腹は膨れないよ」

エリスはキョウの思想を知っている。自分からはバトルを仕掛けない。己の強さを知っているが故に、バトルで相手の心を折りかね

ない事を危惧しているのだ。
はぁ、とエリスは溜め息を吐いた。こういう変に控えめである所が彼の長所でもあり短所でもある。そして彼女が惚れた部分でもある。
だから強く出れないのだ。
だから薦め切れないのだ。
だからいつの間にか窓の外を走っているのにも……

「いつの間に！！！？」

思わず声を上げたエリスは、チーズバーガー達を慌てて平らげ、キョウを追いかけた。

キョウはバーガーショップの近くの噴水の傍にいた。
野次馬が沢山いて、その中心にいる。よく見ると、彼の他に後２人いる。恐らく彼らが騒ぎの元なのだろう。

「キョウ、勝手に行かないでよ！」

野次馬を?き分け、エリスがキョウに近付く。
騒ぎの中心に自分も混ざる事になるのだが、彼女が気付くのはずっと後だ。

キョウは今気付いたようで、済まなさそうにエリスに向いた。

「すまない、エリス。ごたごたにまた首を突っ込んじまった」
「はぁ、それは性分だから良いけど……。で、何があったの?」

元々エリスはブリーダー志願だ。今は修行の為にトレーナーをやっている。つまり、争い事大歓迎なトレーナーでは無いという事だ。
だが、キョウはごたごたに首を突っ込む性分がある。自然と慣れてしまった。

「ん、こっちの人がこの人とのバトルで負けたらしい」

そう言ってキョウは気弱そうなメガネの中年男性を指差し、次に筋骨隆々な大男を指差した。

「で、賞金を差し出したんだが、この人はその金額が不満らしい」

ああ。とエリスは納得した。よくある問題だ。
バトルで負けた側は、勝った側に賞金を差し出さなければならない。最低限所持金の５％は出さなくてはならないが、所持金の都合（塾生なんかでは行き帰りの電車賃）ではそれが免除されたり、もっと少ない額でも済んだりする。そして、それで勝った側が時々金額に関して突っかかる。
お金にがめつい人が絡む問題なのだ。
勝った方が負けた方の言い分を聞かなくてはいけないのはおかしい、

というのがよくある勝者の主張だ。

「当然だろうが！　この俺様が、オージー様が、何故２０００円ぽっちの賞金で我慢しなくてはならんのだぁ！」

オージー。

その名前にはその場にいた全員が覚えがあった。

通称は『懐喰（ふところ）らい』。実力もそこそこあり、負けた側から、酷い時には所持金の殆どを賞金として巻き上げる悪漢だ。

恐喝紛いだが、飽くまでバトルのルールに沿っている為、警察でも中々手を出せないでいる、トレーナー界の札付きだ。

「もっと持ってんだろうが！　とっとと寄越せ！　なんなら財布ごと貰ってやっても良いんだぜ！？」

オージーが男性の胸倉を掴んで引き上げる。小柄な男性は浮き上がってしまった。

「やめて下さい……！　これ以上は……！　娘の誕生日プレゼントが買えなくなる……！」

「知るかぁ！　テメェは勝負に負けた！　だから俺様に賞金を差し出す！　間違ってるか、ああ〝！？」

「だ、だってあのバトル自体、わたしのナッシーがあなたのコドラを睨んだとかいうイチャモンじゃないですか……！」

「黙れ黙れェ！　もういい！　テメェの財布丸ごと頂くからでべなぼぎっずがらばぁっ！」

突然、オージーが奇妙な声を上げて派手に吹っ飛んだ。

その場には吹っ飛んだ拍子に地面に落ちた男性と、渾身の力で拳を放った後のポージングをしているキョウがいた。

「胸クソ悪ィんだよ、おっさん」
怒気を込めて言い放った。
付き合いのあるエリスですら目を丸くして見ている。それほど珍しい事なのだ。
「勝ったからって何だってんだ。勝者の権利を超越してんだよ、何様だテメェ……！」
今にも木刀を取り外してしまいそうな気迫のキョウ。感情を露わにする、それがこの寡黙で無表情な男にとってどれ程珍しい事か。
一方のオージーもユラリと立ち上がった。
怒りの表情を通り越して最早それは修羅の顔だ。
「テメェ、何しやがる！」
「黙れ、トレーナー界の恥ッ晒しがぁ！」
歯を剥き出しにして睨みつけるオージー。
静かに怒気を発して怒鳴るキョウ。
「ウラァ！」
怒りに任せて後先を考えずに、オージーが拳を振るう。
キョウはヒラリと躱すと、爪先を顎に叩き込んだ。
顎が揺れれば脳も揺れる。脳震盪を起こしたオージーは片膝をついた。
「あーあー。キョウにケンカで勝てる訳無いじゃん。素手でリングマに勝てるのに」

エリスが呆れた声を出した。
キョウはケンカが強い。というより異常な強さを持っている。木刀を引き抜けばもっと大きなポケモンと対抗できる。
通常、人間が素手でポケモンに勝つのは難しい。幼かったり、小さいポケモンだったりすれば話は別だが、やはり楽に勝てる訳では無い。

「ぐ……っ」

辛うじて起き上ったオージー。しかし脳を揺さぶられた所為で思うように動けない。
キョウはそんなオージーに静かに、無感動に言った。

「ボールを構えろ、『懐喰らい』オージー・カーペンター。俺とポケモンバトルだ」

脈絡の無い言葉。でもエリスにはキョウの意図している事が分かった。

（キョウの奴……、完全に相手の心を圧し折るつもりなのね……）

ケンカでもバトルでも負かし、オージーを完膚無きまでに叩きのめす腹積もりなのだ。
そうとは（キョウの実力を）知らないオージーはニヤリと笑った。

「おーおー、どうした小僧？　ケンカでポリに捕まるのが怖くなったか？　そりゃそうだろうな、俺様だけケガしてりゃお前が一方的に悪く見えるからな！」

この男はアホなのだろうか。その場にいた野次馬達は揃ってそう思った。
オージーが先に殴りかかったのも、一方的にキョウが悪い訳でも無いのはその場にいた彼ら全員が証言してくれる。どうやらこの男は殴られ、蹴られたショックで脳ミソの中身がぶっ壊れたらしい。
憐れみと蔑みの目で観客達から見られている事を、このアホは知らない。

「いいぜぇ！　俺様が負ける筈が無ェからな。テメェの出す賞金はこの場の観客全員の財布の中身でどうだ？」
『なっ！？』

エリスを含めた野次馬全員が驚き、ブーイングを飛ばす中、キョウは冷めた目でアホを見て言った。

「……そっくりそのまま返してやる。お前は財布の中身全部出せ」
「はっはー！　良いぜ？」
『坊主ぅ！　勝手に決めんなぁ！』
『勝ってくれぇ、少年っ！』
『嫌ぁ！　お給料下ろしたばっかりなのにぃ～！』
「案ずるな、皆。俺がこいつに負ける事は有り得ない」
「はっ！　自分を知るんだな、小僧！　負けて恥を晒しなぁ！」

どうやらオージーはただのアホでは無く、ドアホらしい。明らかに不利な条件を呑んだキョウの自信に気付いていない。

「げっへっへっへ！　じゃあ2対2のシングルバトルだ！　今の内に財布を用意しときな！」
「いいだろう。それと財布を用意するのはお前だ」

キョウとドアホはお互いに適度な距離を取った。普通にバトルを行うならこれで充分だろう。

「エリス、審判頼む」

はぁ、と溜め息一つ。キョウといると何時もトラブルが舞い込んで来る。再開から1時間も経ってないのに、こっちとしては堪ったものでは無い。

「良いけど、ちゃんと勝ってよね？」

「無論」

飽くまでクールに言い放つキョウに、やれやれと首を振りながら2人の間に立った。

そして、いつの間にか審判をやる動作が身に付いている事に気付き、もう一つ溜め息。

「それじゃあ、これより2対2のシングルバトルを始めます。時間は無制限。どちらかのポケモンが2体戦闘不能になった時点でバトルは終了。良いですか？」

「おう！」

「ああ」

エリスがさっ、と両手を上に挙げる。振り下ろせば開始の合図だ。視線をキョウにエリスは移した。

「キョウ、頑張って…！」

「任せろ」

『頼むぞぉ、少年！』

『負けないでぇ！』
『勝ってくれぇ、キョウくん！』

審判であるエリス以外にも観客からも声援が送られる。ドアホはそれを聞いてチッと舌打ち。キョウだけが声援を浴びるのがつまらないのだろうが、自らの言動を鑑みるべきだ。自業自得である。

「それでは……、始め！」

勢いよくエリスが手を振り下ろすのと同時に、２人の手からボールが放たれた。

ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥＤ

第1話：キョウという人物（後書き）

キョウ「2対2のシングルバトルで始まった俺とオージーとの戦い」
エリス「キョウは電気と草タイプなのね」

オージー（ドアホ）「はっはー！　ならこっちはそれに有利なタイプを出すまでだ！」

エリス「キョウ、負けないで！」
キョウ「ああ。実力の差を思い知るがいい」

エリス「次回、ポケットモンスター　ＡＤＶＡＮＣＥＭＥＮＴ『キョウの実力』」
キョウ「皆もポケモンゲットだぜ」
ライチュウ『ラーイ！』

第2話：キョウの実力（前書き）

今回は、主人公のチート気味な実力が判明します。

ではスタート！

第2話：キョウの実力

キョウとオージーとの2対2のシングルバトルが始まった。お互いが最初の1匹をフィールドに繰り出す。

「一の手。煌めけ、黄金の雷（こがねいかづち）。ライチュウ？」

「やっちまえ、ロズレイド！」

キョウが繰り出したのはオレンジ色の電気ネズミ、ライチュウ。一方オージーことドアホが繰り出したのは“ブーケポケモン”のロズレイドだ。手の花の内側に致死性の毒を持つ茨があるらしい。

「はっはー！　草タイプに対して電気タイプ！　いきなり勝ちは決まったようなモンだなぁ！」

「……いいからさっさと来い」

確かに草タイプに対して電気タイプの技は有効では無い。しかもロズレイドには毒タイプもある。ライチュウに対しては武器が2種類あるという形になる。

しかし、ドアホは失念していた。ライチュウに限らず、全てのポケモンは自身のタイプ以外の技も覚えられるという事を。

絶対的な有利さを確信しているドアホは、飽くまでクールで、しかも動じないキョウの態度に苛立った。

「ロズレイド、“マジカルリーフ”だ？」

『ロォオオオズゥッ！』

放たれるのは、特殊なエネルギーを込めた虹色の葉の大群。追尾

機能を持つ葉は一直線にライチュウに向かって行く。

「ライチュウ、“１０万ボルト”」

『ファアアイ、チュゥウウウウウウッ！』

直線的に向かう葉の大群を、ライチュウは電撃で撃ち破った。だけで無く、電撃はそのまま虹色の葉を貫き続け、ロズレイドに直撃した。

『ロォオオオオオオオオッ！？』

「ロズレイド！？」

黄金の電気を浴びたロズレイドは、その場にうつ伏せに倒れてしまった。

『おおぉ～！』

「やたっ！」

「いや、まだだ。威力が削がれたってのもあるが、意外とタフだな……」

直撃した事で勝利を収めたと思ったエリスだったが、キョウはそれを否定した。相手の体力が想定よりも多かったようだ。

オージーも倒れたロズレイドも信じられないといった表情をしている。仮にもロズレイドもドアホも場数はそれなりに踏んでいる。電気タイプの技がここまでの大きなダメージを与えるとは、レベル差が開き過ぎている以外、有り得ない。

そう、相手とのレベル差が開き過ぎている以外は。

ここに至って漸くこのドアホは気が付いた。自分はとんでもなく強い奴を相手取っているのだ、と。
そしてその理解は焦りへと繋がった。

「ど、“毒針”だぁ？」
『ル、ルォオオオオオオ、ズッ！』

毒状態にして弱らせようという魂胆か。有効ではあるが、この状態では無意味に近しいだろう。
ロズレイドの両手の花から射出された毒を帯びた紫の針は群を成し、再びライチュウへ襲い掛かった。

そして、当然それは甘いと言わざるを得ない。“マジカルリーフ”より威力の劣る“毒針”に、しかも体力が殆ど残ってない状態で放たれた技を、対処できないはずが無い。

「“電光石火”」
『ラ、ァイッ！』

光の如き加速で“毒針”を回避すると、ライチュウはロズレイドにその加速を活かしてタックルをぶちかました。

『ロォオオオオオオオオッ！！？』

ロズレイドは派手に吹き飛ばされ、噴水の噴出口の柱に直撃した。
エリスが近寄ると、ロズレイドは目を回して水に浮かんでいた。

「ロズレイド、戦闘不能！　ライチュウの勝ち！」
『わぁあああああああああっ！』

エリスのコールに、観客から歓声が上がった。
一撃も喰らわずに、タイプ相性の不利すらも構わずに相手を倒した。
これが如何に至難の業か、如何にキョウが上級者か、観客も、ロズレイドをボールに戻しているドアホも思い知った。

ふと、キョウが何かに気が付いた。

「ライチュウ、右肩を見せてみろ」
『ライ？』

右肩はロズレイドにぶつけた方の肩だ。
キョウがじっくり調べると、少量だが血が出ており、傷口が変色している。毒を受けた時の特徴の一種だ。

「戻れ、ライチュウ」
「キョウ？」

不思議そうにキョウを見るエリス。ライチュウ本人にすら未だ自覚症状が無い毒状態、少し離れた位置にいるエリスが気付かないのも無理はない。

「恐らくは“毒針”が掠ったか、特性“毒の棘”を喰らったか……。何にせよ、毒を受けている。バトル中は道具が使えないから、ここは引かせる」

そういうと、キョウはライチュウをボールにしまった。
毒は時間と共に身体を巡り、体力を削る。『毒消し』系を使いたいのなら、次のポケモンで、なるべく早く決着を着ける必要がある。

キョウは腰から違うモンスターボールを取り出した。
一方ドアホは構えない。キョウの出したポケモンに対して有利なポケモンを出すつもりなのだろう。

「二の手。轟け、深緑の巨兵。ドダイトス？」
『ドッダァアアアアアアアアアアイッ！』

続いて登場したのは、巨大なカメの様なポケモン、ドダイトス。背中の甲羅には樹木と棘の様な岩がある。この甲羅の上で一生を過ごすポケモンもいるらしい。

「ドダイトスか、ならば……。叩き潰せ、ヘルガー！」
『ヘルゥッ！』

一方ドアホは黒いボディに白い角をもつ“ダークポケモン”、ヘルガーを繰り出した。噛み付かれると火傷の跡がいつまでもジュクジュクと残ると言われている。

「ヘルガー“火炎放射”だぁ？　一撃で決めろぉ！」
『ヘェェル、ガッ！』

指示通りヘルガーは灼熱の炎をドダイトス目掛けて放つ。一撃で決めるように指示したのは恐らくドダイトスのレベルを警戒したからだろう。
しかし、ならば一撃で決めるのは尚更不可能だろう。レベル差が大き過ぎる相手を一撃で倒すのはほぼ不可能。例え効果が抜群でもだ。

ゴウッ、と炎がドダイトスを包み込んだ。しかし、ドダイトスは平然としている。やはりレベル差があり過ぎて大きなダメージにな

らないのだ。
そしてもう1つ。ドアホは大事な事に気が付いていない。
それはドダイトスも攻撃するという点にある。

「“地震”？」
『ドォオオオオオオオオオオオオオ、ダッアアアアアアアアアアアアアイッ！』

ドダイトスは足に高密度の地面タイプのエネルギーを圧縮。そのまま打ち下ろした。地面にヒビが入り、衝撃波が波となってヘルガーを襲った。

『ヘルゥッ！？』

ヘルガーは防御力が低い。対し、ドダイトスは素早さ以外の全能力、特に攻撃力と防御力に秀でている。当然、物理攻撃の“地震”の威力も高い
彼はヘルガーを出すべきでは無かったのだ。

“地震”を真面に喰らったヘルガーは、しかし辛うじて耐えていた。

「！　『気合いのタスキ』か……！」
「今だヘルガー、“カウンター”？」

物理技の威力を2倍にして返す技、“カウンター”。『気合いのタスキ』は代償に凄まじいグロッキー状態になってしまうが。体力全開の状態から一撃で倒されるのを防ぐアイテム。
そして、その分のダメージを倍にして返されたら、いくらドダイトスでも耐えられないだろう。

だが、みすみすそれを喰らう程、キョウは間抜けでは無い。

「“守る”？」

『ドォ！』

ドダイトスの周りを球体のエネルギーシールドが展開した。ほぼ全ての攻撃を防げる優れ物だ。

当然それは“カウンター”とて例外では無い。凄まじいエネルギーを撃ち出したが、ヘルガーのその攻撃は簡単に弾かれてしまった。

「ぐっ、そぉおおおおおおっ！」

オージーは地団太を踏んだ。自分は強い。それを信じて今まで疑って来なかった。しかし、今、その自信を木端微塵に砕かれているのだ。

「止めの“タネマシンガン”。単発でいい」

『ド、ダッ！』

キョウの指示通り、通常種状のエネルギー弾を連射して撃ち出す技“タネマシンガン”を、ドダイトスは一発だけ吐き出した。

しかし、その速度が尋常では無い。一発に集中したので、その分パワーアップしているのだ。

ズッドォオオオオオオ――――――ッン！

そして威力も普通では無かった。

着弾した“タネマシンガン”は、大爆発を引き起こし、爆風が辺りを吹きまくった。

爆発が終わると、ヘルガーは目を回すどころか、泡を吹いて気絶していた。

「ヘルガー戦闘不能、ドダイトスの勝ち。よって勝者、ミカガミキョウ！」

『わぁあああああああああああああああっ！』

エリスの試合終了のコール、そして観客の歓声の中、キョウは喜ぶでも無くドダイトスに近づき、駄目だしをした。

「やり過ぎだ」

『ドォ〜……』

シュン、と項垂れるドダイトス。次は気をつけろよ、と苦笑いしながらドダイトスをボールに戻すと、キョウはドアホに近付いた。

「俺の勝ちだ。俺が勝った時はお前が自分の財布を渡すんだったな」

どこまでも無感動な言い方。ポケモンと意思疎通する時とエリスと話す時だけ僅かな変化を見せる顔は、今はまるで能面のようだ。

「自分でした約束だ。破るわけにはいかないよな？」

勝ち誇るでも見下すでも無い、無感動な瞳。それが逆にオージーの心を逆撫でした。

「うるせぇえええええええええっ！　ゴミクズが、指図するんじゃねぇえええええええええっ！」

いきなり怒鳴り声を上げると、腰のモンスターボールを2つ投げた。

『ガネェエエエエエッ！』
『ストライァアアアアッ！』

雄叫びを上げて出てきたのは鋼鉄の蛇、“鉄蛇ポケモン”のハガネールと、両手に鋭い鎌を持つ“蟷螂ポケモン”のストライクだ。

「なっ！？」

突然飛び出て、しかも今、目の前を塞ぐ形でいる。咄嗟の行動が遅れてしまった。

「“ギガインパクト”、“辻斬り”ィ？」

しかもオージーは有ろう事か、トレーナーであるキョウに対して技を指令。しかもそれを2体のポケモン達は、一切気にせずに突っ込んで来たのだ。

膨大な威力の体当たりと急所に当たり易い斬撃が避ける隙の無いキョウへ向けて放たれた。

ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥＤ

第2話：キョウの実力（後書き）

キョウ「俺とのバトルに負け、逆切れして襲いかかって来たオージー」
エリス「キョウ！　危ない！」
キョウ「くっ…、ここまでか！？」

エリス「次回、ポケットモンスター　ＡＤＶＡＮＣＥＭＥＮＴ『異変の気配』」
キョウ「みんなもポケモン、ゲットだぜ」
ドダイトス「ドォダイ！」

第3話：異変の気配（前書き）

今回は別のゲームキャラが登場です。

キョウ「いいのか？　ジャンル、全く関係無いぞ？」
エリス「ピンチのアンタが言う？　まあ、色々な作品のクロスオーバーを目指すんだし、これくらい良いんじゃない？」

ただ単にバカップルが書きたかっただけなんですよね。自分の中ではバカップルといったらこの2人が真っ先に浮かんだので。

では、ピンチのキョウは一体どうなる！？　スタートです！

第3話：異変の気配

ハガネールとストライクの攻撃が直撃しようとしている。
どれだけケンカが強くても、結局はキョウは生身の人間。当たれば危ないどころか命を落としかねない。

「キョウ！」
（……避けたくても、間に合わない！？）

回避に移り、少しでもダメージを軽減させる為、身体を僅かに反らす。気休めになるかどうか……！

「オーダイル、“ハイドロポンプ”？」

高圧力の水流が噴き出し、間一髪でハガネールとストライクを吹き飛ばした。

効果は抜群のハガネールは勿論、硬いハガネールに頭でも打ったのか、ストライクも目を回していた。

「何モンだぁ！」

水タイプの大技“ハイドロポンプ”を放った青い二足歩行の大ワ

ニ、“大顎ポケモン”のオーダイルと、そのトレーナーと思われる少年が傍らにいた。

金色の髪に緑色の瞳。小麦色に健康的に焼けた肌。年は１０代半ばから後半ぐらい。黒いマフラーが印象的だ。

「テメェ……、俺様の邪魔をするたぁ、どうな「“嫌な音”」おがぁあああっ！？」

ドアホ改め大ドアホは、少年に詰め寄ろうとしたが、オーダイルは口から凄まじい不快音をピンポイントで浴びせた。あれは人に本来撃つ技では無いが、誰も同情はしない。

「大丈夫ですか？」

少年がキョウに話しかける。気弱そうな表情だが、その目には強い光が宿っているのが分かった。百戦錬磨とも言えるだろう。

「ありがとう、助かった」

「いえ、どういたしまして」

温和さと強さを併せ持つ少年だ。感情が薄めのキョウはそんな彼が少し羨ましかった。

「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ……」

いつの間にか大ドアホが“嫌な音”から抜け出していた。周囲のギャラリーに当たる事を警戒しているのか、オーダイルは再び技を放てない。

「うらぁ、死ねよぉ！」

拳を握り締め、更にメリケンサックまで装備した大ドアホは少年に向かって殴りかかった。

が、少年はそれを回避すると、爪先の蹴りを額に、同着でキョウが右の正拳を鼻っ柱に叩き込んだ。

大ドアホは堪らずひっくり返った。

「小僧どもが……っ！」

「寝てろ、クズ」

「快適な牢屋暮らしを」

キョウは冷酷な目で、少年は蔑みの目で、気絶した大ドアホを見下した。

当然、誰も同情なんてしなかった。

オージーがエリスの連絡した警察に連行され、野次馬が散って行った後の噴水にキョウとエリス、少年はいた。

キョウがライチュウに毒消しを塗り終えると、自己紹介が始まった。

「僕はエミル。エミル・キャスニエっていいます」
「ミカガミ　キョウだ」
「エリス・アインシュタインです。よろしく！」
「で、エミル。俺に何か用事があるって？」

キョウの今の表情は感情を込めて無いが、見下してはいない顔だ。区別は付きにくいと思われがちだが、案外顔の微妙な動きで分かったりする。

「はい。あそこに集まっていた人達には全員聞いたので」
「……、何を聞きたい。恩には報いる所存だ」

感情がこもらず、平坦な口調だがエミルは気にしない。知り合いにポーカーフェイスの少女がいて慣れているそうだ。

「えーとですね……、人を探しているんです」
「どんな人？」
「茶髪で青い目の女の子です。白い造花の髪飾りをしてるからすぐ分かると思うんですけど……」

残念ながら、その特徴を持った少女には二人とも心当たりは無かった。その旨を伝えると、エミル少年はガックリと肩を落とした。

「そう……、ですか……」
「一体、どういう関係なの？　待ち合わせには見えないけど」

待ち合わせならこんな回りくどい方法はいらないし、そもそも人に尋ねるのもおかしい。
んー、と唸り、エミルは事情をポツポツと話し始めた。

「その子の名前はマルタ・ルアルディ。僕の恋人です」

事の始まりは5日前にあった大雨らしい。

――――5日前　山中の川縁

エミルは己の行いを思い起こし、歯噛みした。何故正面へと跳んだのか、と。

「エ…ルゥ……！」

「マルタァッ！」

ごうごうと降り注ぐ大雨は止む気配を一向に見せない。雨音と吹き抜ける風、更には雷音で対岸にいる彼女の声も全く聞こえない。

雨粒が袖口から入り込んできているため、レインコートがそろそ

ろ意味をなさなくなるだろう。それに、ボールから飛び出してきた手持ちのアブソルが上流を睨んでいる。何か来る予兆と見るべきだ。
普通に考えれば、確かに橋を渡れば良いだろう。
実際、川に掛っている橋が、岸を挟んだ二人の間にあった。

ただし、それは両端を残して流されてしまっている。
増水した川の勢いに負けて壊れ、流されてしまったのだ。

実は運悪く、それはエミルとマルタが渡っている最中に橋が崩れてしまったのだ。幸い、それぞれが両岸に跳んだので、お互いの身は無事だったが、こうして川の両岸に引き裂かれてしまったのだ。
オーダイルを出して泳ごうにも、さっきから川のポケモンが大小を問わず流され続けている。川幅が広すぎるし、大型のオーダイルでも渡りきる前に流されてしまう可能性が高い。
おまけに流れが速すぎて“冷凍ビーム”での氷の橋ができない。凍った傍から氷が流されてしまうのだ。
水位が高すぎて氷で疑似的な橋も作れない。洪水とも言える、と言えばどれ程の水の量か想像に難くないだろう。
雨粒が次第に霧を作り始めている。空気が冷えてきた証左だ。長居をすると、体を冷やして危険だ。

更に山の中なので電波が届かず、手中の携帯電話も使い物にならない。早い話、近くにいるのに、まるで意志の疎通ができないのだ。

（くっ、鋼の壁にでも遮られているみたいだ！）

彼はマルタの超ヘビー級の愛情表現が少々苦手だ。しかし、それをひっくるめて彼女の事が好きなのだ。特に彼女の笑っている顔を見れば、雷だって洪水だって平気だと言い張れる。

（……！）

雷と鋼で閃いた。意志疎通の方法が１つだけあった。

「行けっ！」

ボールを放ると、中から電磁石を装備したユニットが３つ繋がったポケモンが現れた。“磁石ポケモン”のレアコイルだ。

「レアコイル、川の真ん中まで飛んで電波を中継するんだ！」

『レーア！』

ふよふよとレアコイルが飛んで行き、川の真ん中でピタリと停止した。それを確認したエミルは携帯電話を取り出した。雨に晒されているが、機能は無事のようだ。

エミルのやっている事に感付いたマルタもポシェットから携帯電話を取り出す。

レアコイルは電磁ユニットから電磁波を出して機械の操作ができる。一時期はスロットマシーンを操作するイカサマがジョウト地方のコガネシティであったとの事。

そしてそれが出来るのなら、疑似的な電話の中継地点にもなれるはずだ。

マルタの番号をプッシュし、掛ける。繋がれ……！

『（ガチャ）エミル！』
「マルタ！」

果たして、繋がった。意外にもクリアな声が聞こえたのには驚きだ。
しかし、レアコイルの体力はこの雨の中、電波中継という精密作業にどこまでついて行けるか心配だ。それにアブソルの鳴き声が低くなった。危険だという合図だ。
悠長な事はしていられない。要件だけ伝えてこの場を離れないと。

「マルタ、よく聞いて。アブソルが何かを感知した」
『何か？』
「この増水だと、多分鉄砲水が来る。そうしたらいくらオーダイルでも泳げない。急いでここから離れるんだ！」
『で、でも！　エミルと離れ離れなんて嫌だよ！』

悲鳴にも聞こえたマルタのその思いは痛いほどよく解った。自分だって離れるのは嫌だ。

「……それは僕も同じだよ。でも、ここでこの場から離れなかったら、一生離れ離れだよ！　それでも良いの！？」
『ッ……！　……分かった。ふもとの町で合流しよう！　アジサイシティの噴水広場で！』

「分かった！」

こうして、二人はその場を後にした。鉄砲水が辺りを蹂躙したのは、二人が川縁から離れて1分後の話だった。

今思えば、日にちや時間帯を指定しなかったのはミスだった。そうエミルはぼやいた。確かに、場所だけ指定されても、日も時間も分からないんじゃ仕方がないだろう。

全てを聞いた後、キョウはやはり無感動な顔で頷いた。

「む。探すのを手伝おうか」

「え？」

「山からこっちに来た、という事はルートは限られる。近隣で橋が掛かる程大きな川の流れている山は」

キョウはぬ、と少し離れた一際高い山を指差した。

「アレだけだ」

キョウは物理と地学が苦手だが、この地方の地理をある程度知り尽くしている。エミルの話から、二人がどこの山からこちらにやっ

て来たのかを割り出すのかぐらい造作も無い事だ。
「そして、あそこからなら、遅くとも今日には着いていても良い」
「でも居ないって事は、何らかのトラブルに……？」
「そ、そんな！？」
慌てるエミルに、キョウは優しく可能性である事を諭す。
「あくまで可能性だよ。道を間違えたのかも知れんし、すれ違ってるのかも知れない。気を落とすな」
「……はい」
探しに行こうか、とキョウが提案した時だった。
『――――――――――――――――！』
「「！」」「？」
何かの音が耳に入った。エリスは疑問符を浮かべているが、キョウとエミルは鋭い聴覚で人の悲鳴である事を察知した。
「何、今の？」
「人の悲鳴だ…！」
「騒ぎがあれば人が集まる。人の数だけ情報も集まる」
「行ってみようよ！」
「おう」
「うん！」
エリスの提案に、２人が反対する筈も無かった。
３人は急いで騒ぎのする方へと向かって行った。

TO BE CONTINUED

第3話：異変の気配（後書き）

キョウ「ピンチから脱した俺は、２人と共に騒ぎのする方向へ向かった」
エリス「そこにはなんと、覆面姿の強盗団がいた！」

エミル「あ、あれは！」

キョウ「次回、ポケットモンスター　ＡＤＶＡＮＣＥＭＥＮＴ『愛する事は戦う事』」
エミル「みんなもポケモン、ゲットだぜっ！」
オーダイル『ダァーイルッ！』

第４話：愛する事は戦う事（前書き）

キョウ「エミルとマルタの関係は原作『テイルズオブシンフォニア―ラタトスクの騎士』を知らないと違和感あるんじゃないか？」

ん、まあね。でも異なる世界観の作品のクロスオーバーなんてよくある事でしょ？

エリス「そりゃまあ、ね」

内容が気になるのならｙｏｕ　○ｕｂｅやｗｉｋ○ｐｅｄｉａで。

それじゃあ、スタート！

第４話：愛する事は戦う事

「いた、人が集まってる！」

アジサイシティは町の中心に川があり、そこを挟んで東西に分かれている。噴水広場のあった東側は住宅街やショッピングモール街が、逆に西側はオフィス街が立ち並んでいる。

キョウとエミルが聞きつけた音は西側の道路から聞こえてきたという。その距離は約５００メートル程。

キョウは自然界の中で修業を積んでいる為、どんな小さな音も聞き逃さない鋭い聴覚を持っている。

対しエミルは人とは少し体が違うと言う。どういう風に違うのかは、敢えて突っ込まない事にした（詳しくは原作参照）。

「離してよぉっ！」

「人質は大人しくしてろっ！」

とある大型道路のド真ん中に大型トラックと覆面集団がいた。よく見ると少女を一人、人質に取っている。一人が首元に大型ナイフを当て、別の一人が鉄骨のように太い腕で少女を羽交い締めにしている。

周囲には沢山の野次馬、かと思ったが、覆面集団は2，3丁の拳銃と中型から大型のポケモンで周りを脅している。野次馬より人質の方が正しいだろう。

駆け付けた3人は、当然状況が分からない。が、周囲の音を聞き漏らさないキョウとエミルがすぐに情報を?き集め、分析した。

「ポケモンの強盗団、といったトコロか」
「人質のポケモンをボールごと袋に詰めているみたいですね。下手な銀行強盗より稼げます」
「逆らおうとすれば、人質の少女と周りの人々が危険、か。効率も効果も十分だ」

エリス、とキョウは囁く。エリスは何も言わずにコックリ頷くと、カバンから布に包まれた何かを取り出した。
一方でエミルは首を傾げた。何かが引っ掛かっているのだ。が、それが何か分からない。

『ウ、エエエエエエアッ！』
「「「！？」」」

突然上空から鳴き声がした。上を向くと“鎧鳥ポケモン”のエアームドがこちらを睨んでいた。

「しまった……。斥候がいたのか」
「でかしたぞぉ、エアームド！」

覆面男が拳銃を人々に向け、退くように命ずると、あっと言う間に3人と覆面集団の間にいた人達がモーゼが海を割ったように退いた。

「おめぇら、こっち来い」
「……、リーダー格だな」
「どうして分かるの？」

首を傾げるエリスにキョウは丁寧に説明する。

「拳銃を持ってるからだ。幾つも無い武器を所持してる、というのは腕に自信があるか、高い地位にいる事が必要。しかもエアームドを斥候に飛ばしていた本人だ。つまり、組織の中で相当上位の奴、という事だ」

なるほど、エリスは納得する。と、パン！　という乾いた音と同時に足元のコンクリートが弾けた。

「来いっつってんだろうが！　なんならこのアマを見せしめに殺して、オレ達が本気だって事アピールしてもいいだぞ！」

チッ、とキョウは舌打つ。

「行くぞ。グズグズしてたら人質が危険だ（エリス、合図と共に弾き飛ばせ）」

「（了解）」

割れた人垣を3人が歩く。中心部に着くと、人垣は元に戻り、見張りのサイドンやブーバーが威嚇するように唸り始めた。

勿論全く怖くない。ある程度の実力を手に入れられれば見ただけで強いか弱いかぐらいの区別は付く。覆面達もポケモンも梃子摺る程強くない。さっきの大ドアホの方が幾分強いだろう。

「エ、エミル！」

突然の自分を呼ぶ声にエミルは驚き、顔をそちらに向けた。声も聞き覚えがある。

「マルタ！」

何と、人質に取られていたのはエミルのパートナーであり探し人、マルタだった。

「ほーほー。知り合いか。良かったな再会できてよぉ」

エミルがずっとさっきから引っ掛かっていたのは、聞き覚えがあった人質の声だったのだ。

嘲る様に笑う男の声も、今は気にならない。今、二人の頭の中は今の状況を脱出する方法を高速で模索している。再び旅できるように、将来を誓い合った者同士幸せを掴めるように。しかし、これといった妙案が思い付かない。

ダメか！？　エミルもマルタも諦観した。

「ドダイトス、“地震”だ！」
『！？』

いきなりキョウが叫んだ。が、それが出来るポケモンを彼は出していない。
は、と近くのリーダー格らしき男が嘲笑する。
「おいおいどうしたガキ。頭でもおかしくなっ」
パァン！　パンパン！　パァン！
男の声は途中で遮られた。拳銃やナイフが宙を飛び、地面に打ち付けられた。幾つかは使い物にならなくなってるかも知れない。

エリスの両手には黒光りする金属塊が握られている。

「ご心配無く。ゴム弾です」

彼女が持っているのは拳銃だった。

キョウが叫んだのは注意を一瞬だけ自分に向かせるための囮だったのだ。そして、注意が一瞬だけキョウに向いた瞬間、エリスが取り出した銃で強盗団の得物を撃ち、弾き飛ばす。シンプルかつ的確な作戦だ。

この作戦、言葉にすると簡単そうに見えるが、正確な射撃とクイックドローの腕前が不可欠となってくる。キョウの作戦を信じるエリスと、エリスの腕前を信じるキョウ。二人だからこそ初めて成立するのだった。

「今度こそ、“地震”？」

拳銃が地面に着地するのと同時にキョウは地面にボールを放る。飛び出たドダイトスが地面タイプの衝撃波“地震”を放ち、取り囲んでいたポケモン達を倒した。

自らの周囲を囲んでいたマルマインやゴローンのみを狙ったので、人には被害が無い。代わりにマルマイン達は目を回している。

「この、クソガキ共が……！」

男達がキレてモンスターボールを取り出すのを見ると、キョウは考えていた次の作戦を指示する。

「二人はマルタを救出した後、奪われたポケモンの解放。可能なら戦線に」

「ＯＫ　！」

「分かった！」

エミルが愛しい人に向かって走り出すのを認めると、キョウは目の前の相手に向き合った。

「ナメんなぁ！　エアームド、“エアカッター”だ？」

「“破壊光線”」

ドダイトスの前に飛んで来たエアームドは翼から無数の風の刃を撃ち出した。飛行タイプのこの技は急所に当たり易い。一方ドダイトスは破壊のエネルギーをビーム状にして吐き出した。

ドダイトスの“破壊光線”は“エアカッター”を次々と撃ち抜き、エアームドに直撃した。しかも、威力が全く落ちていない。

『ギェアアアアアッ！？』

「エ、エアームド！？」

エアームドは撃墜され、目を回していた。

男の驚きは尋常では無かった。当然だ。“破壊光線”はノーマルタイプの技。鋼タイプのエアームドには効果は今一つのハズ。なのに一撃でノックダウンされたのだ。

こいつは強い。男の中で危険信号がガンガン警鐘を鳴らしていた。だが、こんな子供1人に負けたとなっては面目が立たない。男には戦い続けるしか道は無かった。

（幸い、ドダイトスは攻撃の反動で動けない。今の内に叩き潰せば、少なくともこのドダイトスは倒せる。そしたら次のポケモンを出される前にトレーナーを攻撃してジ・エンドだ！）

「やれ、トドゼルガ！」
『トォドオオオオオオ！』

ボールから飛び出してきたのは鋭い牙に分厚い皮下脂肪を持つ“氷割りポケモン”のトドゼルガ。実際にその牙は分厚い氷だって貫く鋭さだ。

「“吹雪”だぁあああああああっ！」

ビュウ！　雪の乗った風が放たれた。氷タイプの大技だ。
ドダイトスは草・地面タイプ。氷タイプの技を喰らえば計算上４倍のダメージを与えられる。

そう、計算上は。

「き、効いて無い！？」
『トドォッ！？』

ピキパキと、所々凍りついているが、ドダイトスはピンピンしている。０には何を掛けても１にはならないのと同じ原理だ。４倍のダメージも、０×４では０にしかならない。

「今度はこっちの番だ。ドダイトス、“タネマシンガン”」
『ドォ、ダダダダダダダダダダダダダァァッ！』

「ならば“冷凍ビーム”だぁ！」
『トォドォッ！』

種状のエネルギー弾を無数に吐き出すドダイトスに対し、凍てつく光線をトドゼルガは放った。両者の技は一瞬だけ均衡を保ち、すぐに“タネマシンガン”が打ち勝った。

ドン！ドドドドドドドガァン！

無数のエネルギー弾は一発一発が高い威力を有していた。
通常、“タネマシンガン”や“ミサイル針”の様な技は複数回命中して始めて威力として成立する。一発の威力自体は気にする程のものでは無い。
しかし、キョウのドダイトスの“タネマシンガン”は違った。１つ１つが中級の技に匹敵する威力。それを連発して撃ち出すのだから、いくら上級の技でも抑えきれない。４倍のダメージでも効果的なダメージを与えられない様なレベル差では言うまでも無いだろう。

『トォ～……』
「ト、トドゼルガ！？」

白煙を上げながらトドゼルガが倒れる。“冷凍ビーム”で威力は落ちたが、この様だ。直撃したらどれほどのものか、想像を絶する。

「まだやるか……？」

静かに威圧感を発するキョウに、男は心が屈した。

（コイツには勝てねぇ……！）

ガックリと膝をつき、覆面リーダーは両手を挙げ、降参の意思を示す。

キョウの勝ちだ。

「次は、誰がやられたい」

極めて無表情な青年の顔は、恐怖の権化に見えたという。

「“火炎放射”アーンド“ピヨピヨパンチ”？」
『バクァッ！』
『ガルゥッ！』

灼熱の炎と顎に向けられた拳が相手のシザリガーとゴローニャに当たる。

『ザリィイイッ！』
『ニャァアゴロゥ！』

しかし効果は今一つ。水に炎は、岩にノーマルは効き辛い。
“火山ポケモン”のバクフーンと“親子ポケモン”のガルーラを全面に出して応戦していたエリスは舌打ちした。

「ちゃっ、ダメかぁ」

彼女は相性を弁えていない訳では無い。なら何故彼女は効果が薄い攻撃を繰り出しているのか。それは彼女の後ろに理由がある。

「はい、ボールを持ってトレーナーの所に！」

「邪魔はさせない！　オーダイル、“アクアテール”、グライオンは“炎の牙”だ？」

解放されたマルタは自分のポケモンを探しつつ、袋からボールを解放している。その彼女をエミルがオーダイルと“牙蠍ポケモン”のグライオンで援護している。

二人の作業を安全かつスムーズにさせるために、意地でも後逸させてはいけないのだ。しかし、逆に倒してしまえばエリス＝強いという認識が広まり、エミルとマルタに攻撃が手中する可能性が高い。自分に引きつけつつ、援護するという戦い方を彼女は強いられていた。

キョウが何人も同時に引きつけているが、限界がある。数十人もいるこの強盗団、彼に背中を向ければ危険と認識している奴が何人いるか。

「くっ……！　戻ってバクフーン！　交代、キレイハナ！」

『ハナァッ！』

体力の減ってきたバクフーンを一旦ボールに戻すと、赤い花飾りを身に着けた踊り子の様な小型のポケモン、“フラワーポケモン”のキレイハナをエリスは繰り出した。

「マルタ、まだなの！？　その一発逆転の大技を持った貴女の手持ちは？」

「もうちょっとでこの袋は空っぽになるから！」
「あと一袋だ！」

エリスは事前にマルタからこう言われていた。
『一発逆転の大技を持った手持ちがいるから、見つけるまで時間を稼いで』と。

「次！」
『ストライアッ！』
「ストライク、違う！」
「グライオン、“はたき落とす”攻撃？」
『ゴキゴキ、ククククク……』
「キングラーでもない！」
「キレイハナ、“眠り粉”？」
『ウォオオオオオッ！』
「ウォーグルは珍しいけど、これも違う！」
「ドダイトス、“馬鹿力”？」

次々とボールを開けてはポケモンを解放していくマルタ。しかし、目当てのポケモンがいつまでたっても出て来ない。
次第に焦りが募り、思わず最後のボールを取り落してしまった。

「あっ！」
『ボォオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――――ッ？？？』

取り落としたボールが開き、そのボールから飛び出して来たのは“ドラゴンポケモン”のボーマンダだ。体力と防御面に微妙に難が残るが、最上級のアタッカーとされるパワーファイター。

「エリス、来たよ！　私のボーマンダ！」
「やった、早くお願い！　こっちもそろそろ……」
『“煉獄”だぁ！』
『ハナァッ！』
「ああっ！」

“アリクイポケモン”のクイタランの放った技、“煉獄”がキレイハナにヒットした。威力、命中率ともに“大文字”や“オーバーヒート”に劣るが、当たれば必ず火傷を負う、中々強力な技である。

「戻って！　バルジーナ、間を保たせて！」
『バルゥウウウウッ！』
「マルタ！」
「分かってる！　ボーマンダ、準備は良い？」
『ボォッ！』

マルタからの合図にボーマンダは気合充分に応える。口元には既に凄まじいまでのエネルギーが密集している。“破壊光線”並みのパワーが込められているだろう。

「行っくよぉ！　“竜星群”？」
『ボォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ、マァアアアアアアアアアアアッ！』

ボーマンダは口元に溜めていたエネルギーを空に向けて撃ち上げた。空高く飛び上がったエネルギーは、上空で弾け飛び、無数の流星として地上に降り注いできた。

「！　戻れ、ドダイトス」
「オーダイル、グライオン、戻って！」
「ありがとう、バルジーナ、ガルーラ！」

キョウ、エリス、そしてエミルが事態を素早く察知してポケモンをボールに戻した。遥か上空からは既に赤色の閃光がこちらへ音を立てて向って来ている。

ヒュルルルルルルルルルルルルル……。

「や、やべぇ！　戻るんだゴルーグ！」
「あわわわわわ！　サボネア、戻って！」

ギャラリーや戻ったポケモンと共に闘っていた人達も次第に事を理解し始めた。一方で覆面達はまだ感づいてない。これが勝敗を分けた。

ドガァン！　ドドドドドドドドドドドドドガァァァァァン！

「うわあああああああああ！」
「ぎゃあああああああっ！」
「グァァァァァァァァァァァッ！」

“竜星群”を敵味方入り乱れた場所で使えば、当然味方にも敵にも被害は出る。今回は味方が素早く引き下がってくれたお陰でどう

やら敵のみにダメージが発生したらしい。

「く、車、うわあ！」

「ボールを……！　ぎゃあ！」

逃走しようとしたり、袋を担いで逃げようとした奴はキョウがいつの間にか出していた“鬼蜻蛉ポケモン”のメガヤンマが追撃を放っては撃沈させている。そのスピードは全ポケモン中五指に入る上、高い特攻を兼ね備えるハイスピードなパワフルアタッカーだ。羽から発する衝撃波と強力な顎の筋力で、逃げる者は誰も逃がさない。落ちてくる流星も、持ち前の速度の前では遅すぎるくらいだろう。

「……逃がさねぇよ。必殺の“エアスラッシュ”だ」

『メェガ、ヤンマッ！』

ゴウ、とブレードのような風が巻き起こり、辺りを蹂躙する。そこに流星が更に追撃を仕掛ける。

流星によって発生した煙が晴れた時、覆面強盗団は残らずのびていた。

遠くから車が何台もやって来るのを、未だ解放されていないポケモン達を袋から出していたキョウは気付いた。

「警察と……、マスコミもいるな、この数は」

作業の速度を乱暴とも言える速度に上げ、袋の中身を空にすると、キョウはエリス達と共にそこから立ち去る為、３人の手を引いた。

「ちょ、ちょっと、どうしたのキョウ！」
「ポリとブンヤが来る。下手すっとこの町に何日も縛られるぞ」
「げ、マジ！？」
「大マジだ」

キョウもエリスもかつて１度、警察と報道陣に巻き込まれた事があった。１０日近くその町に拘留され、有る事無い事を新聞に書き綴られたという苦い経験がある。

「マルタ、逃げよう！」
「捕まったらイチャイチャできないモンね！」
「違うけどさ……」
満場一致で逃走が決定。４人は走ってその場を後にしたのだった。

ＴＯ　ＢＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＥＤ

第４話：愛する事は戦う事（後書き）

キョウ「撤収に成功した俺達はポケモンセンターで休息を取っていた」

マルタ「えへへ～？　エミルだ～い好き！」

エミル「ぼ、僕も好きだよ……／／／」

エリス「ところがそこで意外な人物と出逢う！　次回ポケットモンスター　ＡＤＶＡＮＣＥＭＥＮＴ『第５話：自信と過去と秘密』！
皆もポケモンゲットだよ！」

バクフーン『バクァッ！』

キョウ「砂糖が……、ウプッ」

第5話：自信と過去と秘密（前書き）

キョウ「おぷっ！　あ、甘い物は嫌いじゃ無いんだが……っ」

エリス「糖尿病に、なる……！」

苦いお茶、いるか……？　取り敢えず、可能な限りカットして、読者への、影響を抑えた……。

キョウ・エリス『ナイス……』

では、始まります……！　プハッ！

第5話：自信と過去と秘密

「まさか連中は、俺らがこの町に残っているとは思わないだろうよ」

アジサイシティの東側、つまり住宅街やショッピングモールの立ち並ぶ方、ここのポケモンセンターに見事に覆面強盗集団の逮捕に最も貢献した4人、つまりキョウ、エリス、エミル、マルタは滞在していた。

「逃げたと見せかけてその場に留まる。敵の目を欺くのに使われる戦法の一つだね」

「敵じゃ無いんけど……」

エリスが得意気にキョウの戦略を分析すると、エミルが苦笑いを浮かべてツッコミを入れた。

ポケモンセンター。全国の津々浦々、町や主要な道路に存在するトレーナーの為の施設だ。

ご存知の傷ついたポケモンの治療は勿論、宿泊や食事の提供を有料（双方格安）で行っている。

4人はその2階の多人数用の部屋に現在滞在している。夜の星明かりがよく見える、中々良い部屋だ。

「エ～ミルッ！」

ピョーン、という擬音がつきそうなくらい元気良く、マルタがエミルに飛びついた。

最初はキョウもエリスも目を丸くしたが……、

「ははは、マルタ……♪」

この通りエミルも満更では無さそうなので、深くは突っ込まない、というかスルーする事にしたのだった。

「また会えて、ホントに良かった。キミはやっぱり私の王子様なんだよ！／／／」

「はは、もう6回目だよ、それ。でも、マルタが無事で何よりだよ／／／」

ちなみにこの遣り取り自体が6回目である。変わったのは数字ぐらいか。

「満腹だ（口の中どころか身体中が甘ったるい）」

「うん……（ぷはぁ！）」

恋人のいないキョウとエリスにとってはこの甘い空気（砂糖）はツライ。

キョウは鳥肌が立っているし、エリスは口の端から砂糖が零れ始めている。バカップルとはそこに居るだけで他人に被害を与えるモノなのだと、2人は知った。

知る事は大人になる事だ。

こちら男湯。キョウとエミルがのんびりと湯船に浸かっている。

「～～～♪」

「キョウって鼻歌歌うんだね」

「おかしいか？」

「ううん、静かに入ると思っていたから、ちょっと意外だっただけ」

当然の事ながら、センターにはお風呂がある。施設はかなり豪華、というか良質で、料金も格安だというのに、どうしてこんなにも設備が整うのか。

全国のポケモントレーナー達の謎の１つである。

「エミル～、そっちはどう～？」

「大丈夫だよマルタ～」

頼むから風呂とかでは自重して欲しい。キョウとエリスの考えがシンクロした。

「はぁ～♪」

「ふぅ～♪」

そして女性陣に色っぽい声を出すのも止めて欲しかったキョウであった。
女性に対する免疫は無いのかも知れない。
「ところで……」
ひとしきりマルタと壁越しにイチャついたエミルはキョウに視線を戻した。
「この身体の事か……？」
「うん、やっぱ聞いちゃマズかった？」
興味を示すのも無理は無い。彼の身体は傷だらけだったのだ。主に刀傷や火傷の痕が目立つ。
歴戦の軍人、そういう印象を受けた。
「……、今は話せない。俺の過去にケリを付けたら話す。それでいいか？」
暗に聞くな、或いは時が来たら話す。そう言っているように聞こえた。
「うん、分かった」
「……、感謝する」
上がろうか、そう言ってキョウは風呂から上がる。エミルもそれに倣う。
「マルタ～、先に上がってるね～？」
「オッケ～！」

頼むから自重して欲しい。キョウとエリスは本気で思った。
ガララッ、と風呂の戸を開け、腰にタオルを巻いたキョウが出ようとした時、誰かとぶつかった。
コロン、と誰かの持っていた石鹸入れが落ちた。

「失礼、不注意でした」
「いや、オレのほうこそ……、キョウか？」
「む？　……リョウイチ？」

『あれ、モトコ？』
『エリスじゃん！』

偶然にも出会った人物、それは別々の方向へと旅立った仲間、小林（こばやし）　良一（りょういち）、そして村田（むらた）　桃都子（もとこ）だった。

―――キョウ達の宿泊部屋

「何故ここに。エリスは道を別にしたと言っていたが？」

再び部屋。リョウイチとモトコを部屋に招き入れ、自己紹介を済ますと、キョウは早速エリスも気になっていた質問を投げ掛けた。

いや～、とリョウイチは頭を掻き、バツの悪そうな顔をした。

「そうなんだけどサぁ、オレ達もこの町に用事があってよぉ」

「用事？」

「いやまあ、オレの姪っ子がバトルの指導してくれって言われてよ

ぉ。逃げたんだが、町の外で捕まっちまって……」
「で、ちゃちゃっと終わらしたんでしょ、リョウイチの事なんだから？」
「それが用事済ませるついでに買い物したら遅くなっちまって……。で、一泊してから行こうとしたってワケだ」
「合点が行った」

要はタイミングが、或いは出会った建物が悪かった、という事か。

「ところで」

モトコが重要な話をする、と言わんばかりに話を切り出した。

「ここにいる全員、ジムバッジは幾つ手に入った？　あ、あたしは５つね」
「オレもだ。まあ旅路が同じなんだから当然っちゃあ当然なんだが」

モトコとリョウイチが取り出したバッジケースには、確かに同じジムバッジがそれぞれ５つ入っていた。
ここにいるのは皆トレーナー。ライバルでもあるだろう。互いを鼓舞する意味でもバッジの確認は、親しき間柄でよく行われる。

「私？　私は４つ」

エリスがカバンの内側に隠されていたバッジケースを取り出す。

「僕達は６個だよ」
「お揃いだもん♪」

ポシェットから取り出したバッジケースとマフラーの内側に仕込

んだバッジをマルタとエミルが見せる。

「キョウは？」

「７つだ」

最後にキョウがケースを取り出して見せる。

「わ、凄い！」

エリスが驚嘆の声を上げる。彼女は数に驚いた訳では無い。キョウの集めたバッジが問題なのだ。

「これ、この地方の八帝リーダーのだ……！」

「おめぇ、腕上げまくったなキョウ」

このグレップ地方は、様々な地方から腕利きのトレーナーが集まる、所謂エリートトレーナーの巣窟。当然、その地方にあるジムも腕前の高いリーダーが務めるジムとなる。

キョウのジムバッジは十数人いるグレップ地方のリーダーの中でもトップクラスと謳われる８人の内の７人のモノだったのだ。

「やるんだな、キョウ。最後の八帝戦を！」

「ああ」

漆黒の瞳がリョウイチを捉える。瞳の奥の静寂なる業火が、彼らには見えた気がした。

「八帝リーダーを倒してリーグに行く。俺の目的の為にここまで戦ってくれた皆の為にも、そして、いつか来るその日の為にも、この猛者の座を容易く譲り渡すワケにはいかないんだ」

キョウが何を思って強くなり、何を思って旅を続けているのか。それは誰も知らない。一番付き合いが長いエリスですらもだ。
だから彼らは目的を敢えて聞かない。その先にある何かに触れる事を躊躇い、或いは彼の心に土足で踏み入る事を己に許さないのだろう。
そしてそれは正解だった。彼の目的を聞けば、誰もが止め、誰もが共感の意を示さないだろうから。

「最東端の町、ザクロシティへ俺は向かう。皆はどうする」

キョウの目の炎はいつの間にか消えている。それを本人は自覚しているのだろうか。キョウの問いに皆が答える。

「オレは南を迂回してからサクラシティに行く」
「あたしも。ウィードタウンのジムリーダーを倒してバッジをゲットする予定」

リョウイチとモトコは南へ。

「僕達は西に行ってから行くよ。仲間との待ち合わせもあるからね」
「また会おうね」

エミルとマルタは西へ。

「私は北。そこでポケモンを鍛えるんだ」

そしてエリスは北へと向かう。

「そっか。オレ達全員離れ離れか……」

しんみりするリョウイチにキョウは付け加える。

「俺達は仲間だ。距離は関係ない」

仲間とは心で繋がっている己の分身。例え彼岸と此岸ほど離れていようともそれは変わらず、心の繋がりは容易く切れはしない。

きひひ、とリョウイチは頭を掻いて笑った。

「はは、違いねぇ。悪いな、変な事言ってまって」

「心は繋がっていても寂しさはある。変でもなんでも無い」

キョウは僅かに口の端を歪めた。笑みである事はすぐに分かった。

――翌日

「じゃあねー」
「また会おう！」
「頑張って下さーい」
「バイバーイ！」
「元気でね～！」
「健闘を祈る」

明朝、ポケモンセンターの前で6人の男女が別れた。
ちなみに上から順にモトコ、リョウイチ、エミル、マルタ、エリス、キョウだ。

袂を分かち、キョウは町の外に行く。

「……すまない、皆。俺は、皆の様な心は持てない」

悲しい瞳を無表情な顔に浮かべて歩く。歩く。そして歩く。

「俺は、目的を果たす為に、復讐する為に強くなった。ゴメンな……」

ただただ、ザクロシティを目指す為に歩く。
まず目指すは、アジサイシティとザクロシティの間にそびえ立つ山、アイスマウンテン。

to be continued

第5話：自信と過去と秘密（後書き）

キョウ「あっま甘なカップルと別れ、俺はたった一人で雪山に立ち往生していた」

そこに現れたのは……！

キョウ「まーた違う作品のキャラ出しやがって……」

はい、懲りてません！

キョウ「ったく。次回　ポケットモンスター　ADVANCEMENT『フライパン・ホッチキス・ハンター』。皆もポケモン、ゲットだぜ」

ライチュウ『ラーイ！』

誰が出てくるか、バレちゃうかな？

第6話：フライパン・ホッチキス・ハンター（前書き）

キョウ「まーた別の作品のキャラ出しやがって」

だって、物語回すにはこのくらいしか……。

エリス「要するにその程度の腕しか無いって事だね」

がーん！　ドサッ！

リョウイチ「あ、倒れた。まあ、1話2話の為に誰かのキャラを借り出すってのもどうかと思うしな」

モトコ「そだね。じゃあ、作者が倒れたので、あたし代わりにやるよ？　第6話、スタートです！」

第6話：フライパン・ホッチキス・ハンター

年中まるでバニラアイスのように真っ白な雪が積もっている連山、アイスマウンテン。グレップ地方の中心にドン、とそびえ立つこの山は地方を東西南北に分けている。要するにX字型の連山だ。

ちなみに現在の季節は温暖。雪はあれど、所々に黒い地面が顔を覗かせているシーズン、の筈なのだが……。

ビュオォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

「死にはしねぇが……、寒いっ？」

猛吹雪が吹きまくっていた。この時期には珍しい事で、実際地元の住人でも目を丸くする様な事だとか。

その地元でも珍しがられる吹雪に、滅多な事では声を荒げないキョウも寒さに叫んだ。

ちなみに本来ならば雪山で叫んではいけません。声による空気の振動で、雪が崩れるからです。要するに雪崩が起きます。

ゴウゴウと吹きすさぶ雪風に、キョウの絶叫は吸い込まれ、いそいそと彼は踵を返す。こんな視界が悪い時に歩を進めれば命の保証はできないからだ。
キョウが数十メートル進むと、大きな山小屋が現れた。実際はただ単に吹雪と夜の闇で姿が隠れていただけなのだが。

「ただいま」

静かに戸を開けて入る。
山小屋の中では彼の手持ちのポケモン達がすやすやと眠っていた。
中心に燃えるタテガミを持つ“火の馬ポケモン”のギャロップを据えて暖を取っている。こういった所はきっと自然の知恵なのだろう。

「しかし、このままじゃいけないな」

この山小屋に実質拘束されるようになってから既に2日が経っている。食糧が底を尽いた訳でも、誰かが怪我をした訳でも無いが、長くここに滞在するのも考えものだ。
キョウは目的があって行動している。それも何年かかるか、ひょっとしたら一生かかっても達成出来ないかも知れない目的を。
故に一分一秒が惜しい。無駄な時間を過ごしたくない。
或いは、自分があまり喋らず、感情を表に出さないのはこの無駄な時間を過ごしたく無い点に起因しているのかも知れない。

「はぁ……、？」

吹雪にまみれた轟音の中で全く異なる音が耳に入った。
この音は……。

「扉か」

吹雪の中、何度も扉を開けるのは気が引ける。室内の熱が逃げれば当然寒くなる。自分は暑さ寒さには無頓着だし鍛えてあるから易々と体調は崩さない。だが、ポケモン達は違う。
特殊な環境の中にしか生きられないポケモン、温度変化に対応しきれないポケモン、この世界には未確認のも含めれば１０００を遥かに超える種類のポケモンがいると言われている。自分達が認識しているのはその内僅か７００種足らず。全てを認識するには明らかに足らない。

「……話が逸れたか」

まあギャロップで暖を取りながら眠っているし、少しだけなら大丈夫だろう。
そう思ってキョウは静かに扉を開ける。幸い、風は扉から中へ吹き抜ける方向へ吹いていなく、抵抗も吹き込みも無く開いた。

ガチャッ

ドサッ！

「！？」

戸を開けるのとほぼ同時に１組の男女が室内へ倒れこんで来た。
青年と少年の境ぐらいの年の男が、セミロングの大人っぽい女を背負っている形だ。

「ゼェ……、ゼェ……」

男の方の息が荒い。倒れたというのに背中に背負っている少女を離さないのをキョウは不審に思ったが、よく見るとあちこちが凍りついている。間接を始めとして動かない箇所が多い為、降ろしたくても降ろせないのだろう。
一方の少女は意識が無いのか、ピクリとも動かない。微かだが寝息の様な音も聞こえる。

「吹雪く雪山で寝るのか、この娘は……」

雪山で寝れば死に直結する、というのはどんな物語でも書かれる。
基本的に防寒装備が不十分だと、寒さで人は寝られない。しかし、眠れずに体力が奪われていくと、低体温症（ハイポサーミア）となり、意識が朦朧としていく。この状態において、人は恒常性（ホメオスタシス）を失っており体温の維持が難しくなっている。
つまり、雪山での『寝るな』は“ｓｌｅｅｐ（眠る）”の寝るで

は無く、“ｆａｉｎｔ（気絶する）”の方となる。
気絶して体温が下がれば死ぬ。即ち凍死だ。
「早く室内に運ばないとな……」
雪風が室内に吹き始めた。扉を閉めて二人を室内に運ぶ。少年に付着していた氷は既に室温で融け始め、水となっていた。

さて、今のキョウの状況を説明しよう。
右手にはフライパン。油が残っているが、中身は無い。キッチンには出来上がった料理が置いてあるから調理後だ。
左手には木刀。彼の愛用の一品で、“翠嵐”と銘打たれている。
そして何故そんな関連性の無い２つを双手に携えているのか、といえば、その答えは１つ。

「っ……！」
「……！」

フライパンでホッチキスを、木刀で鋏を受け止めているからだ。
ホッチキスと鋏を装備し、キョウに襲いかかっているのは、先程の少年に背負われていた少女。憎悪、或いは憤怒の表情を浮かべ、一切の手加減の余地も無いと言わんばかりに力を入れて武器（？）を押し込んでいる。

「ちっ！」

力押しは通じないと悟ったか、一端距離を取る少女。
一方で何故襲われているのか、という疑問を思考の彼方に投げ飛ばし、キョウもまた迎撃の態勢を取る。

「……、助けたハズが、仇でそれを返されるとはな」
「とぼけた事を……。そうじゃなくても、何者か分からない貴方にかける優しさは無いわ」

攻撃的な少女だ。さっきの少年なら話が通りそうだが、生憎と彼が眠っている部屋に行くには少女のすぐ後ろにある戸を経由しなくてはならない。キッチンの廊下は2人がすれ違える程のスペースは無い。

「はっ！」

口腔内に突き込まれたホッチキスを、無理に体を倒して引き抜く。頬の内側なんて挟まれたら痛みで動けなくなる。
不自然な体勢を狙って両目を潰そうと鋏が来る。これはフライパンでガード。
返しに木刀を振るうが、少女はこれを屈んで避ける。空振った木刀が空を切る。

「ちっ……」

リアルファイトはそれなりに自信があったキョウだが、この少女もまた強い。動体視力が良いし、手持ちの武器の特性も理解している。
彼女の文房具はリーチが短いが、反面懐に潜り込めば戦いやすい。この狭い廊下なら木刀を自由に振るえず、彼女の方が有利だ。

ならば、その有利を逆手に取ればいい。
唸りを上げて突き込んで来た鋏を見て、タイミングを確信。
「（ここだ！）はぁっ……！」
木刀を短く持ち直し、振る。リーチの長さを変えて鋏を弾き飛ばす。鋏はそのまま彼女の後ろの床に刺さった。
「！」
「もらった……！」
フライパンの側面を側頭部に叩き付けて昏倒させる。それでこのリアルファイトは終了する、筈だった。
「甘いわね！」
「！？」
その刃の一撃を、間一髪で避けられたのは偶然。鋏が無くなった手にはカッターナイフが握られていた。
（……こいつ、袖口の中に隠していたのか！？）
「チェックメイトよ」
木刀を持ち直す時間も、フライパンで迎撃する暇も無く、キョウはホッチキスを口の中に突っ込まれた。
分の悪い賭けで、ホッチキスを綴じられる前に木刀かフライパンで反撃を試みようとした時だった。
「そこまでだ」

倒れていた少年が、少女の腕を引き、このケンカに幕を引いた。

「ごめんなさいね、私の勘違いだったわ」
「僕からも謝るよ。ゴメン」
「いや、双方無傷で済んだ。大丈夫」

少女と少年、戦場ヶ原ひたぎと阿良々木暦の謝罪を受け、しかしさっきまで攻撃を受けていたとは思えない冷静さで返すキョウ。

「この猛吹雪の中を背負ってもらった恋人を気遣う、当たり前でしょう？」
「、その通りね」

ひたぎはクールに返すが、その返答の前に一刹那だけ隙があったのをキョウは見逃さなかった。

「思われているな、阿良々木さん？」
「う……、ああ、まあ、ね？」

ひたぎはどうやら突っつきには反応しなさそうなので、暦にキョウは振る。予想通り暦はドモった。

「どうでもいいのだけれど、地の文でも下の名前で呼ばれるのは良い気分じゃないわね」
「「？」」

「こっちの話よ」
「「？？」」
それより、とひたぎは持ち直す。
「この吹雪も酷いものね」
ガタガタと窓に叩き付けられる雪風を聞きながら零す。
「本当にね。ハンターにも困ったもんだ」
「ハンター？」
思い人に続けた暦の言葉、ハンター。その言葉を聞き逃さず、キョウが突っ込む。
「うん、なんでもこの山の主をハンターが捕まえようとしているんだって」
「それに怒った主に影響され、この猛吹雪が起こっているそうよ」
「……」
それを聞いたキョウは思案顔を作った。能面の様な代わり映えしない顔が変わるのは、彼が真剣な証拠だ。
「……キョウくん？」
暦の呼びかけにも答えない。やがて腰からボールを外すと、目を覚ましている手持ちのポケモン達の方へと歩み寄った。
「……戦えるか？」

『ウォオオオオオオ！』

静かに短く語りかけたキョウの言葉に、６匹のポケモン達が元気に答えた。

その反応をしっかり確認したキョウは全員をボールに戻すと、小屋を出る準備を始めた。

「ちょっと待った！」

「待ちなさい！」

そしてそれを呼び止める声が２つ。勿論、暦とひたぎだ。

「向かうのかい、主を狩ろうとしているハンターの所へ」

「……ああ」

「確かに、吹雪が止んでいないから主はまだ健在だとは思うけど」

しかし、この猛吹雪の中、居場所の分からない主を探し当てるのは不可能に近しい。万が一見つかったとしても、その時には体力が尽きている可能性だってある。出発の目的がハンターの討伐なら、それでは意味がない。

その事を諭されたキョウは、無表情に返す。

「ならば、どうする。この吹雪は俺のギャロップの“日本晴れ”ですら受け付けない強力な悪天候。

天気が変わらないのならば、いつ出発しても同じ。そして時間をかければかけただけ、主が捕らわれる可能性が高まる」

「だからって焦り過ぎだぜ？　冷静になれよ」

「そうよ。それに、私達がそれに関して何も対抗策を持っていないと？」

「うん、取り敢えず伏線もフラグも無い事言うの止めようか、マイ

パートナー」

暦とひたぎの言葉は正論だった。

どうやらキョウは、心のどこかであの日の事件に重ねていたのかも知れない。だから一刻でも早く助け出そうと焦った。人間であろうとポケモンであろうと、あの日の自分のと同じ目に遭わせたく無かったから。

「……、俺が悪かった。済みません」

「謝る程じゃないよ」

ヒラヒラと手を振り、キョウの謝罪を水に流す暦。ひたぎがそれは置いておきましょう、と話の流れを変える。

「私達は旅をしながら困った人達を助けているの。勿論、ジムバッジを集めながらね」

「今回は地元のレンジャーの依頼から、この山の主とハンターの情報を手に入れたんだ。つまりこの吹雪の元をどうにかするのが僕達の仕事って事」

「……、俺に話しても？」

「構わないさ、お前も手伝ってくれるんだろ？」

二人はあの行動からキョウの性格を大まかに見破ったようだ。協力者になってくれと暗に言っている。

そしてそれを断る理由は、キョウには無い。

「そちらが構わなければ」

――――明け方・山頂付近

「いくら主でも休息を取らない訳にはいかない。明け方、一時的に吹雪の弱くなる時間帯がある。そこが進撃の機会よ」

というのがひたぎの弁だ。確かに、雪風は夜とは打って変わって止んでいる。吹いているとしても、そよ風程度だ。

山頂付近を寝床にしている主を探す為、三人は山頂の近くを歩き回っていた。モコモコしたジャンパーが暖かい。運動をすれば身体が温まり、逆に防寒着を熱く感じるが、そうならない点を考えると、外気温はどうやら相当寒いようだ。

「いた、主だ」

暦が岩の陰に隠れて他の二人に指し示す。同じ岩陰に避難したひたぎとキョウもその存在を確認した。

『ユゥウウウウウウウウウウウ……』

丸太のような太い腕に、氷の様ながっしりとした身体。白い毛並みに、鋭い目つき。“樹氷ポケモン”のユキノオーだ。その体から流れる気迫は尚猛者と知らしめる。

その身体のあちこちに傷跡が付いている。切り傷、刺し傷、火傷……。

「どれもこの雪山で自然につく傷じゃないな……」

ハンターは近くにいない。

「どうする？　捕まえます？」

「無理だろう。怪我は負っているけど、致命傷には見えない」

「気性も荒くなってるでしょうから、無闇な干渉は逆効果でしょうね」

「……」

ユキノオーは辺りを徘徊している。その眼は血走っている。かなり睡眠不足のようだ。

無闇に天候を霰状態にしないのは、エネルギー温存の為だろう。

「！」

キョウは手早く近くに落ちていた石を拾い上げた。

遅れて暦とひたぎも石を拾う。

「そぉ、れっ！」

キョウが勢いよく石を投げる。対象はユキノオー、ではなく、その陰から突き出ている人の顔だ。

ゴチン！

『ぎゃばぶっ！』

命中。石が続いて2個投げられる。

「おまけよっ！」

「持ってけっ！」

がん！　ごん！

『アグアッ！　ゲギャア！』

人間、突然の痛みには妙な悲鳴を上げるものだと、静かに関心した3人。

それはそれとして、当然、石を投げられれば怒るのが人間の心というもので、

「こんの、何しやがんだぁあああああああっ！」

『ノ、オォオオオオオオオオオオッ！』

そして当然、自分を傷つけた輩が近くにいれば、怒るのが人間でもポケモンでも同じなので。

「あ。ぎ、やあああああああああああっ！」

殴られました、ハンターが。

草タイプの大技“ウッドハンマー”では無いだけ、あのハンターはきっと運が良いのだろう。

「よし！」

「……（ぐっ！）」

「ふむ」

ガッツポーズをする暦、静かにユキノオーに親指を立てるひたぎ、満足気に頷くキョウ。別にポケモンを取り出して倒さなくても良いのだ。

要は倒せば良い。ならば、こうしてやれば自分達が手を下す必要

は無い。

数メートルの高さを舞い、地面にドサリと倒れたハンター。ピクピクと痙攣している所を見ると、まだ生きているようだ。

「「「チッ！」」」

舌打ちしたのは勿論3人共だ。

『隊長！』

『ヤバイ、早く主を、ギャアアアアアアアアアッ！』

次々と殴り飛ばされていく人々。隊長と呼んでいた事と、装備が似通っている点から、多分最初に殴り飛ばされたハンターの仲間なのだろう。

「……、やり過ぎた、かしら？」

人間が次々と宙に舞うその光景は実にシュールだった。

しかし、観客でいられたのはそこまでだった。

『ユッキ、ノオォオオオオオオオオオオオオッ！』

ユキノオーが大量の氷の欠片をこちらに向けて放って来たのだ。先制攻撃用の氷タイプの技、“氷の礫”だ。

「うわぁあああああぁっ！？」

「きゃぁあああああっ！？」

「と、とととととっ！？」

まあ、当たり前と言えば当たり前。主にとって人間とは自らの領域を侵し、しかも攻撃までしてきた不届き者。善人悪人の区別なんて分かる筈も無い。
大急ぎで再び岩陰に隠れた3人。ガリガリと岩が削れていく。
「ちょっと、この岩壊されるの時間の問題だぜ！？」
「でも、隠れる場所なんて無いわよ！？」
「くっ！」

手持ちのポケモンを出して応戦すれば、それこそユキノオーに『自分は敵だ』と言ってるようなもの。別に仲良くなりに来た訳では無いが、無用な衝突は避ける必要があるだろう。
とにかく、この岩陰が破壊されるのはそう遠くない。脱出しなくては危険だ。生身で攻撃を受けたら無事では済まないだろう。
ボールを1つ開け、中から最も信頼できる仲間の内の一体を出現させる。

「ライチュウ、地面に向けて“瓦割り”？」
『ラァッ！』

力一杯ライチュウが地面に手刀を振り下ろす。舞い上がった雪が煙幕となって辺りに立ち込めた。

「メガヤンマ、“催眠術”？」
『メェガ！』

更にキョウはメガヤンマを取り出して空へ放り、指示を出す。指示するのは状態異常“眠り”にするエスパータイプの技だ。
メガヤンマの状態では覚えないが、進化前のヤンヤンマの状態で覚えさせる事が出来る。ハイスピードアタッカーであるメガヤンマ

が使えば、目が覚めた頃には誰も追いつけない神速の域に達する。

ポワワワ、と光を発している目でユキノオーを見つめるメガヤンマ。すぐにユキノオーは倒れ、眠りについた。

『ｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚｚ……』

「……何て発音するんだ……？」

何日もの睡眠不足が尾を引いているようだ。統計学上、“催眠術”の命中率は６０％だ。しかし、これは当たる外れるの他に効く効かないがある（勿論特性“不眠”“やる気”を対象としたものは除いてある）。

だと言うのにこうもアッサリ効いた。それが意味するのはただ１つ。ユキノオーの疲労だ。

メラメラと心の中に炎が渦巻き始めたのをキョウは感じた。怒り、憎しみ、憎悪。そのどれもが当て嵌まる感情。そしてその心は暦もひたぎも同じだった。

ギン！　と背後で立ち上がり直したハンター達を３人は睨みつけた。

『隊長、主が眠りました！』

『捕獲網用意！　しくじるなよ！』

『ガキが邪魔です！』

『ならばガキごと捕まえろ！　その後の始末はお前らに任せる！』

（ブチッ！）

キョウの心の中で何かが切れた。堪忍袋の緒だと気付いたのは、ライチュウに“雷”を、メガヤンマに“エアスラッシュ”を指示した後だった。

『『『ぎゃあああああああああああああああっ！』』』

ザシュッ！　ザシュッ！　ザシュザシュザシュッ！
ドッガアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！

風の刃と電気の柱がハンターを残らず蹂躙する。キョウのポケモンはトレーナーを躊躇なく狙うように訓練してある。故に手加減は一切合切無い。キョウの怒りにライチュウとメガヤンマもリンクして怒っているのだ。

「おーおー、容赦無いねぇ」
「求める方が間違いだとは思うのだけれど？」
「ま、それもそうだね」

暦とひたぎが呆れた声を出す。肩を竦めているが同情はしない所を見ると、咎めるつもりは無いようだ。

『ボォオオオオオオッ！』

いつの間にかに出していた“鉄鎧ポケモン”のボスゴドラとキョウが対峙していた。角の長さで年齢が、鎧の傷の数で実力を測る事ができるポケモンだ。
ハンターのボスゴドラの角は平均よりやや短いが、傷の数は多い。若くして場数を踏んで来たという所か。
普通に考えれば強敵だ。しかし、キョウは余裕の表情を浮かべている。ライチュウとメガヤンマを下がらせ、別のボールを取り出している。

「砕け、鉄(くろがね)の戦士よ。ボスゴドラ！」
『ボォオオオオオオオオオオオオオオッ！』

キョウもまたボスゴドラを取り出す。雪山には氷タイプのポケモンが多く生息している事から考えた手持ちだ。
氷には炎、岩、鋼、格闘が有効。故にキョウは最も信頼しているドダイトスともう1体をパソコンの預かりシステムに預け、偵察用のメガヤンマ以外を氷タイプに対抗できるポケモンにしたのだ。
キョウのボスゴドラの角の長さは平均を上回っている。更に体の傷の数は尋常では無い。どちらが強いかは傍目からでも明らかだ。

「ボ、ボスゴドラ！　“水の波動”だ！」

先に動いたのはハンターのボスゴドラ。2本の角の間に水の塊を精製し、砲弾状に固めて撃ち出した。
水タイプのこの技が直撃すれば鋼と岩の両方のタイプを併せ持つボスゴドラには痛いダメージを喰らう筈なのだが、キョウは回避の支持を出さない。
水塊はボスゴドラに直撃。腕を交差してダメージを削ったが、ズザザザ、と2メートル程後退した。

「“瓦割り”」

漸く反撃の支持をキョウが下した。先程ライチュウが出したのと同じ、“リフレクター”や“光の壁”を砕いて攻撃できる格闘タイプの技だ。
ガゴギッ！　とキョウのボスゴドラの振り下ろした右腕はハンターのボスゴドラの頭頂部に直撃した。派手な金属音を鳴り響かせ、ハンターのボスゴドラは見事に撃沈した。

『ギ、ギュゥ……』

「何故だ！？　何故貴様のボスゴドラは立っていられるんだ！！？」

「……、テメェの足らねぇ脳味噌で考えろ」

動揺するハンターにキョウは冷たく返す。

理屈だが、非常に簡単だ。

まず、ボスゴドラは様々な技を覚えるが、その割に特殊攻撃力や特殊防御力が伸びやすい、という訳では無い。ボスゴドラの伸びやすい能力は攻撃力と防御力。つまりは殴る蹴るの技の方がより効果的にダメージを与えられるという訳だ。

そして相性。水タイプの“水の波動”は2倍、対し格闘タイプの“瓦割り”は4倍のダメージを与える。2と4、どちらが大きいかは子供でも分かる。

最後に各々のボスゴドラの取った姿勢。キョウのボスゴドラは腕をクロスさせてガードしたが、ハンターのボスゴドラは頭に直撃した。防御の体勢を取るか取らないかでもダメージを緩和できるか否かが変わって来る、という訳だ。

「“ラスターカノン”」

続いてキョウはボスゴドラに鋼の粒子砲を指示。雪原を抉りながら射出され、応戦しようとしていたハンター達を彼らのポケモンごと吹き飛ばす。

「ジュプトル、“タネマシンガン”？」

「ユキメノコ、“シャドーボール”？」

その後ろから別のハンターを狙っていた暦とひたぎが偶然同じライン上に立って指示を下す。

“森蜥蜴ポケモン”のジュプトルと“雪国ポケモン”のユキメノコだ。それぞれ森林での最速の戦士と、吹雪の中で亡くなった女性の化身と云われている。

鋼の砲撃、種状の連射弾、影のエネルギー球が撃ち出された。

『ギャアアアアアアアッ』

吹き飛ばされたハンターはそのまま斜面まで行き、ゴロゴロと下って行った。ここらの傾斜は緩い上にデコボコの石があっちこっちにあるので、九分九厘どこかに引っかかっているだろう。

「天誅」

キョウは小さく、小さく呟いた。

「手伝ってくれてありがとう」
「助かったわ。作戦を立ててくれたのも貴方だしね」
「……どういたしまして。俺はただ、虐げられている人やポケモンを見過ごせないだけです」

数時間後、晴れ渡った空からやって来たヘリにハンターを乗せ、キョウ、暦、ひたぎは下山を始めた。猛吹雪の原因であるユキノオーが眠った為、無線もヘリも使えるようになったのだ。

「お二人はこの後どうなさるので？」
「バッジは８つ集まってる。一足先にリーグに行くよ」
「大会で会いましょう。貴方は最強のリーダー戦、頑張ってね」

行く先に大き目のロッジが見えて来た。ここから先はロープウェイで行くが、各々目的地が異なる。暦とひたぎは山麓の港、キョウはザクロシティに通ずる道路へ。ここでお別れだ。

「ではお気をつけて。旅も夫婦生活も」
「、ええ。そちらもね」
「、ああ。キョウくんも最後のジム戦、負けるなよ」

キョウがからかって言うと、２人はほんのり顔を朱に染めて答えを返す。

無口なキョウだが、嘘や冗談を言わない訳では無い。

「それでは、また！」
「頑張れよー！」
「また次の機会に！」

手を振りながら、先に来たロープウェイに乗って行った2人をキョウは見送った。

完全に姿が見えなくなった後、キョウは静かに呟いた。

「……、俺にはきっと、ああいう風に、幸せへと歩く事は無いんだろうな」

その呟きは白銀の雪原に吸い込まれ、誰の耳にも入る事は無かった。

TO　BE　CONTINUED

第6話：フライパン・ホッチキス・ハンター（後書き）

キョウ「雪山を下山した俺は、目的地であるザクロシティに到達する」

エリス「ところが、そこでまた私達と遭遇！」

エミル「この一件の裏には何かの陰謀のにおいが！」

マルタ「時間潰しの為に参加する事になったコロシアム」

モトコ「でもでも、そここそ黒幕が暗躍する場所の一端だった！？」

リョウイチ「次回、ポケットモンスターＡＤＶＡＮＣＥＭＥＮＴ『お金は人を駄目にします』！」

エリス「みんなもポケモン、ゲットだよ！」

ガルーラ『ガルルゥッ！』

第7話：お金は人を駄目にします（前書き）

ザクロシティへと無事に辿り着いたキョウ。しかし、そこの町のセンターには思いもよらない5人がいて……？

キョウ「物好きだな、お前も」

リョウイチ「別のゲームキャラ出して怒られないようにな」

ウグッ……！　で、ではスタート！

第7話：お金は人を駄目にします

―――ザクロシティ

「……暑い」

雪山のハンターの件から一晩が経ち、キョウはバスに乗ってグレップ地方最東端の町、ザクロシティに到着していた。
このザクロシティの通称は“常夏の赤い町”。文字通り年中南国の気候で、街並みは赤い。この町の建物は遮光性の高い地元の土を使用して快適に過ごせるように工夫されており、その土が赤みがかっている為、こうして家々が赤いらしい。
反射熱を防ぐ為にコンクリートの舗装も無く、街路樹として椰子の木を始めとした南国の背の高い樹木が植えられている。
遠くでさざ波の音が聞こえる。海が近い。

「センター……」

基本、キョウは暑さも寒さも平気だ。都会のヒートアイランド現象のド真ん中に立っていても涼しい顔をしていられる。
しかし、バス停から町の入り口まで約1キロ。旅する身としては身体は鍛えられているが、やはり重い荷物を背負って歩けば暑い。人体として当然の摂理だ。
やっとの思いでポケモンセンターに辿り着く。冷房が心地良く、汗が少しずつ引いていく。
と、見知った顔触れがそこにはいた。

「……、それぞれ西、北、南に行ったんじゃねぇのか」
「ありゃ、キョウ」
「ひさしぶり！」
「ヤッホ～」

キョウが出くわしたのはアジサイシティで別れた筈の仲間、エリス・アインシュタインを筆頭とする5人だった。

「……船が出ていない？」
「うん、何かあったみたい」

エリスから事情を聞くキョウ。何かトラブルがあったらしく、この港から出るはずの船が全て運行を休止しているらしい。だけでなく、何隻もの船がザクロのミナトに緊急停泊したという。
５人は既にやる事を粗方済ませ、船で移動中だったとの事。しかし、何かが起こり、全ての船が数時間前にザクロシティの港に緊急停泊をした、というのが船の乗務員の弁だという。
だが、それはおかしい。
緊急停泊するにしても、こんな一度に船がそうなるのは変だ。港でのトラブルなら航海中の船には影響は出ない。
「妙だ。妙過ぎる」

「うん、皆そう思ってるんだけど、何も手掛かりが掴めなくて……」
まあ、一般人にそうそう情報を公開する訳が無いだろう。
「で、仕方ないからこの町に停泊してたの」
5人がここに出揃ったのは全くの偶然だという。これまた妙な偶然があったものだ。
「それはまた難儀だな」
「でしょ？　でもね、悪い事ばかりじゃないんだよ？」
エリスの言葉にキョウは首を傾げた。
じゃーん！　とエリスは近くの柱に貼り付けてあった2枚のポスターを示す。
「“ザクロコロシアム”と“ビーチシュート”……？」
「そ。要するにこの町のコロシアム使った大会とビーチバレーだよ。開催はそれぞれ明後日と十日後ね」
ザクロシティはただの南国の町では無い。観光地として名が知られているのだ。
綺麗な海や、地方特産の食べ物を使った料理。更には行事が多く、1年の半分はお祭りなんじゃないかと言われている程だ。
そして、行事が近い日にちに連続して行われる事もあまり珍しくはない。
「面白そうだし、出てみない？　モトコ達も一緒に出るって」
「いや、俺は……」

キョウはあまり社交性が高い方ではない。寧ろ物静かな状態を好む。故にこういった大会は苦手なのだが……。

「優勝賞金が出るって」

「乗った。幾らだ」

お金が絡めば話は別。財布の中が基本的に寂しいキョウにとって、こういった纏まった収入を得られる物事は跳び付きたくなる程大歓迎なのだ。

「コロシアムが２００万円、バレーが５０万円だって。あ、優勝できなくても賞品が出るって書いてある」

「両方出よう」

即断即決。１円でも多く懐に入れ、旅の資金にしたい。薬や食糧代もバカにならないのである。

キョウの瞳はメラメラと燃えている。そんなに賞金が欲しいのか、とエリスは静かに心の中でツッコんだ。声に出さないのは、出すと面倒事に発展しかねないからだ。

冷静で動じないキョウがここまで本気になるとは、本当にお金は人を駄目にしますね。

５人は早速コロシアムとバレーに登録しに行く事にした。

―――スタジアム受付

バレーの受付を済ませ、６人はスタジアムの受付まで来ていた。

「タッグ？」

キョウが受付嬢に聞き返す。

「はい、こちらでは予選進出後、タッグバトルを行う事になっております。

したがってパートナーとなる人物を共に登録するか、又は個人で参加された後に抽選で選ばれた方とタッグを組んで頂きます。

また、パートナーが予選にて敗退した場合も抽選となります」

要するにシングルで予選を勝ち抜き、本戦はタッグバトルをやれ、という事らしい。

「……パートナー、か」

正直、キョウは今までパートナーどころか、誰かと共に戦った事は無い（無論ポケモンは除く）。

たった一体でエリートトレーナー十人に勝利した事もあるし、それこそ雑魚が相手なら１００や２００はもの数ではない。隣に誰かいて戦った事など１度足りとて無いし、そうした必要性を感じた事も無かった。

ふと、窓の外を見れば二組の少年少女がタッグバトルの練習をしている。息がピッタリとはあまり言えないが、少なくとも個々でバラバラに戦っている感じでは無い。

「エミル～、一緒に出よう？」
「マルタが好いなら♪」

「へへっ、優勝はオレ達ベストカップルが頂きだぜ／／／」
「冗談が過ぎるよ、リョウイチ」
「ぐ……；」

既にエミル&マルタ、リョウイチ&モトコはタッグの申し込みを終えてしまった。つまりエリスとキョウは一人。

「……エリス、相方を頼めるか？」
「間が長いよ、キョウ。いや断らないけどね」

キョウの問いにエリスが不満げに答える。
ちなみにキョウの沈黙した時間は優に2分を超える。不服に思っても仕方がないだろ　う。こうして、3組の出場メンバーが決定した。

【一組目：ミカガミ　キョウ　&　エリス・アインシュタイン】
【二組目：コバヤシ　リョウイチ　&　ムラタ　モトコ】

【三組目：エミル・キャスタニエ　&　マルタ・ルアルディ】

「健闘を祈る」
「まずは予選突破だね」
「ま、予選ぐらいは勝ち抜こうや？」
「リョウイチ、予選敗退なんて許さないからね？」
「優勝目指してガンバロ、エミル！」
「僕達の力を見せてあげよう！」

――夕方・ポケモンセンター前バトルフィールド

「もう一度だ」
「うん、バクフーン“大文字”？」
「ドダイトス“エナジーボール”」

『大』の字に放たれた炎と草木の力を密集したエネルギー弾がぶつかり、爆発を起こす。

「あっちゃ……。最大級の技と中級技が同威力かぁ」
「だが威力としては申し分無い。後はお前の指示次第だ」

２人は今、センターの前のバトルフィールドを借りてバトルの訓練をしていた。それぞれパートナーと軽めの練習試合を行い、息の合い具合の再確認を行っている。
といってもエミル＆マルタは周りが砂糖を吐きまくる程のバカップルで精々が微調整。リョウイチとモトコもタッグで旅をしていてツーカーのコンビネーションができる。
問題はキョウとエリスだった。
マルタに音頭を取ってもらう。

「はい、ワンツー、ワンツー、そこで同時に！」
「“タネマシンガン”」
「“火炎放射”？」
『ダァッ！』
『ブ、ァァァァッ！』

息が上手く合わないのだ。必ずどちらかが一歩遅れたり、お互いの技を潰してしまったりしてしまう。
今だってドダイトスの“タネマシンガン”にバクフーンの“火炎放射”がついて行く形で放たれた。教鞭を取ってくれているマルタには申し訳無い気分だ。

「ゴメン、キョウ。また合わなかった」
「いや、俺の方が合わせるべきなんだ。謝るのは俺の方だ」
「ほらほら、謝る暇があったらもう１回」

ショボン、と肩を沈ませるエリスを慰めようとするキョウ。しかし口下手な彼がまともな事を言えるハズが無く、マルタに強引に流れをぶった斬ってもらう。

「“葉っぱカッター”」

「“火炎車”？」

本当に上手くコンビネーションを取れるのか、不安で仕方ないキョウとエリスだった。

――大会当日・控え室

『グライオン“地震”だぁ？』

『ボーマンダ“ハイドロポンプ”？』

『サンダース“雷”射出？』

『マグカルゴ“オーバーヒート”？』

予選試合は控え室の中継用モニターを見ている限り、第1試合の勝者はエミル、第2試合マルタ、第3試合リョウイチ、第4試合モトコと、順調に勝ち進んでいる。

予選は様々な形式のバトル中から抽選で選ばれた物を勝利すれば良いというもの。4人ともシングルバトルだったようだ。

「皆、順調だね」

「ああ。まずは一勝だな」

ちなみにパートナーとして申請した者同士はぶつからないように調整されているらしい。コロシアムの目玉は息の合ったタッグバトルなので少しでもパートナーがいない人を減らす工夫なのだろう。

ピンポンパンポ～ン、とアナウンスが入った。

【予選第5試合に出場される方はスタジアムの方にお集まり下さい。繰り返します、予選第5試合に……】

キョウは手持ちの札を確認する。第5試合に出場するようだ。

「行って来る」

「ガンバ！　私はこの後だから、試合の後は応援宜しく！」

「分かった」

エリスに手を振り控え室を後にするキョウ。その顔は静かな自信

に満ち、何事にも動じない猛者の顔だった。

【レディ～スア～ンドジェントメ～ン！　た～だ今より、予選第５試合を開催いたしま～すっ！
司会はワタクシ、柳井之蔵（やないのくら）　猛聖（たひし）司がお送りしまぁ～す！】

司会席の収まったボックス席からドジョウ髭の男がマイクに向かって叫ぶ。
むあっ、とするような熱気にも関わらず観客は席に沢山収まっている。庇が日陰を作ってはいるが、色々大丈夫なのだろうか。

【まぁずはＡブロックバト～ル、＜青色の姫君＞アシュリー・リバプール　対　＜槍騎士＞エヴィ・サンドラ！】

司会のトークを聞き流し、キョウはフィールドを観察する。
フィールドは６つのバトルフィールドに区切られており、ＡからＦまでのブロック、計１２人が同時に戦える仕組みになっているらしい。
ちなみに頭の称号は参加時に自分で登録するもの。カッコ付けやいい加減な感じでつけると恥ずかしい思いをする。
庇のあるベンチの下で自分の出番を待つ。やがて、５つの試合が終わり、自分の番が来た。

【そしてＦブロック、今大会予選のダ～クホ～ス！　毎回上位入賞

を果たす＜クリムゾン・スター＞赤星秋棚（あきたな）　対　八帝ジムリーダーの内七人を倒し、この町の最後の一人を倒さんとやって来た男＜黒き剣豪＞御鏡　響！】

『ワァアアアアアアアアアアアアアアアアアアァッ！』

思わずキョウは耳を塞いだ。相手のアキタナという人物も同じだった。

キョウとアキタナにマイクを持ったスタッフが近付いて来た。恐らく目玉と成り得るであろう二人に意気込みでも聞きに来たのだろう。

【えー、ここでアキタナ選手とキョウ選手に、この試合に対する意気込みを聞いてみたいと思います！】

やっぱり。

【アキタナ選手、意気込みを！】

「オレ様がこんなガキに負けるハズがネェからな。こんなモン無意味だよ、無意味。

ちゃちゃっと倒して今年こそ優勝掻っ攫うぜ！　例年通りにパートナーに足引っ張られネェようにな！」

『ブーブー！』

嫌な奴、キョウはそう思った。鉤鼻に垂れ下がった目、下卑た笑いを浮かべる口。どれもハッキリ言ってモテル要素にはならない。

【えー、キョウ選手！】

「……、ただ、勝利するだけだ。少なくとも、対戦相手の力量を見て分からない奴に負けるつもりはない」

『おぉー！』

上手く言えただろうか、とキョウは不安になる。こうして大勢の人の前で喋るのは苦手だ。

「こ、の、ガキィ……！」

「……何だ、ザコ？」

売り言葉に買い言葉。アキタナの安い怒りをキョウは挑発を持って返す。唯我独尊な奴にはこれで十分な効果がある。

「（ギリ……）やい司会！　とっとと試合始めろや！」

【えー、何やらアキタナ選手がお怒りのようなので、ルーレットを回したいと思います】

『アハハ……』

怒りの原因なんざモロ分かりだというのに、司会の対応は観客の失笑を呼んだ。

このコロシアムの予選のバトル形式はルーレットで決まる。

シングルバトル、ダブルバトル、トリプルバトル、ローテーションバトル、というメジャーなものから、１体でも負けたら敗北というオールバトル、シングルとダブルを好きなタイミングで切り換えられるチェンジバトルがルーレットの中にある。

これら６種類に出場ポケモンの数を１～６の中から決めるルーレットの二つがボックス席の上の電光掲示板に取り付けてある。

合計で３６種類のバトル状況が発生する、という訳だ。

【そぉ～れではぁ～……、ルーレットォ、スタァ～トッ！】

ピピピピピピ……、と光が点滅しだし、ルーレット内を廻り出す。

やがて二つの光がピーンという音と共に止まる。

【けって～い！　４対４のチェンジバトルだぁ～！
このバトルは最初シ～ングルバトルだがぁ、双方の合意があればダブルバトルに変更できるぞぉ～！】
『わぁあああああああぁっ！』

キョウとアキタナがボールを手に取る。
ギラギラと闘志に燃えるアキタナに対し、キョウは冷静に相手を見据えている。

【それではぁ……！　バトル、スタァァァァァトッ！】

２人が一斉にボールを投げる。

「潰しちまえ、ミノマダム！」
「煌めけ、黄金の雷。ライチュウ！」

キョウは最も信頼できるポケモンの内の１体、ライチュウを。アキタナは“蓑虫ポケモン”のミノマダムを繰り出した。葉っぱがついた緑色の蓑を纏っている、という事は草タイプの草木の蓑だ。

「相性、貰った！」

電気タイプの技は草・虫タイプのミノマダムには効果が薄い。確かに一見有利、しかし、キョウと彼のポケモン達はその様な苦境を幾度も乗り越えて来た歴戦（？）の猛者。この程度、屈するには足らない。

「ミノマダム“目覚めるパワー”だ？」

『ミィ〜、ノォ〜ッ！』

特殊なエネルギーを集め、同じポケモンだったとしても違うタイプになる技、“目覚めるパワー”をミノマダムが撃ち出す。色は焦茶色、つまりは地面タイプだ。

しかし、キョウはそれ見ても涼しい顔をしており、下す指示も緩やかだ。

「“雷”」

『ルゥアイ、チュァアアアアアアアアアアアアッ！』

キョウがただ一言技名を指示。黄金色に輝く閃光は瞬く間にフィールド一帯に広がり、一筋の豪槍を成して“目覚めるパワー”を消し飛ばし、ミノマダムに直撃した。

『ミノォオオオオオオオオオオオオッ！？』

「み、ミノマダム！？」

電撃が続いた僅か数秒の後、ミノマダムは煙を上げながら倒れ、目を回していた。

「ミノマダム戦闘不能、ライチュウの勝ち！」

『わぁあああっ！』

たった一撃、それも効果が今一つな技で仕留めた事に会場は騒然となり、大いに盛り上がった。

【何という事でしょうかぁっ！　一撃で崩れ落ちたぁっ！　強い、

強いぞぉキョウ選手ぅっ！　今大会注目のダークホースの名は伊達じゃ無いようだぁっ！】

司会もキョウの並外れた実力に驚嘆の意を隠せず、大きく取り上げている。

そして当然、そんな事をされればアキタナの方は面白くない。

「うるせぇっ！　こんなんマグレに決まっている！

次はお前だ、イノムー！」

『イノォ……ッ！』

ミノマダムを半ば乱暴にボールに戻し、アキタナは次なる手持ち“猪ポケモン”のイノムーを繰り出した。

氷と地面の二つのタイプを併せ持ち、体力と攻防の力を併せ持つ前衛型のアタッカー。体毛が長い為に目は余り良く見えないが、代わりに物音に敏感であり、突進の破壊力は凄まじい。

「うぉらぁあああっ！　“地震”だぁ？」

無言でイノムーは前肢を地面に踏み込ませ、衝撃波を生み出す。

波は高速でライチュウまで向かう。が、

「跳んで“瓦割り”」

『ファイッ！』

容易く喰らってやられる程、キョウ達は弱く無い。

高く跳び上がったライチュウは右手に闘気を溜め、その力を解放しながらイノムー目掛けて振り下ろした。

効果抜群＋落下。幾ら防御がそれなりにあろうと、イノムーには耐えられるモノでは無かった。

「い、イノムー戦闘不能、ライチュウの勝ち！」
【なぁ～んと2連勝！　アキタナ選手を相手にキョウ選手、快進撃だぁぁぁぁぁぁっ！】
『わあああああああああああああああっ！』

呆然と、倒れたイノムーを見続けるアキタナ。しかし、気を取り戻すと、今度はボールを二つ放った。

「おぉおおらぁっ！」
『スワァッ！』
『ヘルルルゥ！』

“白鳥ポケモン”のスワンナと“ダークポケモン”のヘルガーだ。白と黒のコントラストを構成しており、また、水と炎、地上と空中という風に対応している。
そしてこれが意味するのは……。

【おおっと～！　アキタナ選手、残った2体でダブルバトルを挑んで来たぁ！】
「……、受けて立つ」

ダブルバトルだ。チェンジバトルの特徴、双方の合意に基づき、シングルバトルからダブルバトルに移行できる。

「ライチュウ、戻れ」
『ラァイ』

キョウはボールにライチュウを戻し、別のボールを二つ出す。

「羽ばたけ、神速の斬撃。メガヤンマ。
押し切れ、重きなる兵。ハリテヤマ」
『メェガ、ヤンマ！』
『ハ、リィテェッ！』

キョウが繰り出したのは“鬼蜻蛉ポケモン”のメガヤンマと“突っ張りポケモン”のハリテヤマ。
こちらは地上と空中という組み合わせは同じだが、速と遅、斬と打の組み合わせだ。パワフルアタッカーである2体の組み合わせで勝負を挑む。

【それではぁ……、ダブルバトルゥ……、スタァァァァァァァァァァアトッ！】

「やっちまえぇ！」
「GO！」

4体2組のポケモンは同時に駆け出した。

TO BE CONTINUED

第７話：お金は人を駄目にします（後書き）

キョウ「後半戦が始まったアキタナとのバトル。俺は順調に押して行ったが、土壇場で相手のスワンナが根気を振り絞る」

エリス「凄いパワー……」

キョウ「負けてたるかよ、ハリテヤマ、行け！」

リョウイチ「次回、ポケットモンスターＡＤＶＡＮＣＥＭＥＮＴ『第８話：決着、そして『！」

モトコ「皆もポケモン、ゲットだよ！」

マグカルゴ『マッグゥ！』

第8話：決着、そして（前書き）

キョウＶＳアキタナ、決着。

悪役にしようと思っていたのに、あれ、アキタナがいつの間にか良い人に……。

第8話：決着、そして

「スワンナ“追い風”だぁ？」
「メガヤンマ“影分身”」

キョウのコロシアム予選のバトルは大詰めを迎え始めていた。
対戦相手のアキタナは自分と味方の素早さを上げ、対してキョウはメガヤンマの回避率を上げる。

「スワンナは“暴風”、ヘルガーは“鬼火”？」
「メガヤンマはもう一度“影分身”、ハリテヤマは“穴を掘る”」

混乱の追加効果のある飛行タイプ最強クラスの技“暴風”と、火傷状態にする“鬼火”に対し、キョウは回避を選択。
次の瞬間メガヤンマは無数に分身し、ハリテヤマは地下へと潜り込んだ。

「ＡＴＴＡＣＫ（アタック）」

その一言を引き金にハリテヤマが地下から上空へ向けて力一杯ヘルガーを突き飛ばす。

『ハァリィッ！』
『ヘルゥァアアッ！？』

空中高く飛んで行ったヘルガーは防御が所謂『紙』である。パワーアタッカーのハリテヤマから効果抜群の物理攻撃の一撃を受けれ

ば……。

『ヘルゥ……』

「ヘルガー、戦闘不能！」

当然、目を回す。

アキタナの顔に動揺が走る。自分の手持ちが2度も3度も瞬殺されては、どんな自信家でも焦るものだ。

「す、スワンナ、メガヤンマに“水の波動”！」

「“原始の力”で迎え撃て」

スワンナは飛び上がって手前に持って来た双翼の先端に水を結集し、丸く固めて放った。これに対してメガヤンマは手先（足先？）に大地から流れて来た力を同じく固く丸めて射出する。

水と地の砲撃。一瞬の均衡を保って、軍配が上がったのはメガヤンマの“原始の力”だった。

『スワァァァァァァッ！』

「スワンナッ！」

見事に撃ち落とされたスワンナは、地面に激突。技同士のタイプ相性で辛うじて威力が耐え切れるまでに落ちたのか、なんとか立ち上がった。

しかし、最早戦えないのは火を見るよりも明らか。戦闘の続行はできないと判断するのが賢明だ。

トレーナーの強さとは、何も向かって来る相手全てを倒せる事だけでは無い。適切な判断、タイプ相性の暗記の他、引き際を見極める事もある。

忘れてはいけないのが、ポケモンは人間の代わりに戦ってくれている、という事。戦えない彼らを引かせるのもまた責任であり、戦いなのだ。

「……どうする。降参する事もまた戦いであり、そしてそれは恥では無い」

「っぐぅ！」

ギリッ、と歯軋りをするアキタナ。強さの自信とトレーナーとしての責任が葛藤し、天秤に掛けられている。そして、

「……、スワンナ、お疲れ。戻ってくれ」

責任に秤が傾いた。

腰からボールを外し、スワンナに向ける。

『スゥ、ワァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

だが、スワンナはこのまま引く事を良しとしなかった。

そこにはトレーナーの為に戦うという、確固たる絆があった。

「スワンナ……。ありがとう！　行くぞぉ！」

バサリ！　と勢い良く翼を広げ、高く飛翔したスワンナ。それを見てキョウは一言。

「見事だ」

素直に二人の絆を認め、メガヤンマを下がらせる。そしてハリテヤマに迎撃を支持する。

「行くぜぇ、スワンナァ！　必殺の“ブレイブバード”だぁ？」
「迎え討てぇ！　ハリテヤマ“爆裂パンチ”ィ？」

上空から青白い炎を纏って特攻を仕掛けるスワンナ。
今にも爆発しそうなエネルギーを拳に収束させたハリテヤマ。
2体の攻撃は正面衝突し、大爆発を巻き起こす。黒煙が周囲に立ち込め、視界を塞ぐ。その煙が晴れた時、激突の勝敗が決した。

『ハリィ……』
『スワァ……』
「！　ハリテヤマ、スワンナ、同時戦闘不能！　よって勝者、キョウ選手！」

『わぁあああああああああああああああっ！』

ハリテヤマとスワンナは双方共に目を回して地に倒れていたのだ。
これによりアキタナの出場可能な手持ちは4体とも戦闘不能。一方でキョウはまだ3体残っている。

キョウは静かに2体をボールに戻し、労いの言葉を掛ける。

「お疲れ」

たった一言。されどもそれが冷たいものでは無い事ぐらい、彼と付き合いの長いポケモン達は理解していた。
腰にボールを装着すると、キョウはバトルフィールドを横切り、

アキタナに手を伸ばす。

「な、なんだよ？」

「試合前、貶すような事を言ってしまって済まなかった。アンタは良いトレーナーだ。それに、久々に熱いバトルができた、ありがとう」

「……ハッ！　よせやい、キャラじゃねぇ。だが、オレもまだまだって事がよーく分かった。これからまた特訓だ」

あばよ、と手を振り、アキタナは試合会場を後にした。

フッ、とキョウもそれに手を振り返した。

『ニドクイン、“冷凍ビーム”？』
『プリリィ～！』

『プリン戦闘不能、ニドクインの勝ち！　よって勝者、エリス選手！』

予選最終試合のハイライト。エリスが2対2のシングルバトルで相手の“豚猿ポケモン”のオコリザルを“ドリルポケモン”ニドクインの“破壊光線”で撃破。続いて登場した“風船ポケモン”のプリンを相手取り、“毒針”で弱らせ、“冷凍ビーム”で倒した。

「腕を上げたな、エリス」
「まーね♪」
【こ～れにて本日のバトルはす～べて終了！　これより、明日からのパートナーを～発表しま～す！　さ～あ、貴方の相方は果たして

生き残っているでしょ～か！
それでは～、モニタァアアアアアアッ、オン！】
関心するキョウを余所に、モニターに登録写真が並べられる。当然、勝ち残ったキョウ、エリス、リョウイチ、モトコ、エミル、マルタのタッグがバラバラにされているワケも無く、無事にコンビを組む事になった。
が、
「！　３試合目……！」
「私達が、モトコ達と……！」
そう、このトーナメント、全部で６４組１２８名が参加しているのだが、その戦いの中、リョウイチ＆モトコのペアとエミル＆マルタのペアが準々決勝の１つ前、双方２回勝利すればぶつかるのだ。
「俺達は決勝か」
対し、キョウとエリスのタッグは決勝まで勝ち残らないと戦えない。つまりは最後まで生き残る事がぶつかる条件となるのだ。
「……、決勝戦で会おう」
「負けちゃダメだよ！」
キョウが４人の方を向いて口の端を上げて微笑する。これが彼なりの笑顔だと気付くのに数秒も掛からなかった。
エリスもニッコリと、されど挑戦的に笑う。
「おう、必ず！　オレ達がベストタッグだって教えてやるぜ！」
「バトルじゃあ何が来ても負けないからね！」

「……（……、はぁ）」
「僕達も頑張るよ（マルタ、あれって……）」
「途中で負けたら駄目だからね！（うん、モトコって鈍いのかな？）」

頼もしい奴らだ。キョウは静かに呟き、グッ、と親指を上げる。
他の皆もそれに対しサムズアップで返した。

友情はここにライバル意識と重なり、そして互いを研磨する元となる。そしてそれは彼らを更なる高みへと引き上げる。
愛や絆は弱者の傷の舐め合いでは無い。心と心で繋がる、真の強さなのである。

――――船着き場の空き倉庫・夜中

「チっと、乱暴だったか？」
「問題無い。人数は無事揃った。我々に無関係な無知蒙昧な輩がどうなろうと知った事では無い」

真っ暗な倉庫の中、明りも無しに数十人の男達が一つの空き倉庫の中に集まっていた。彼らの服にはどこかしらにとあるシンボルがついている。
髑髏の額に禍々しい程に真っ赤な星がデザインされているマークだ。
肩、額、胸元、膝……。場所はバラバラだが、１つ言える事がある。彼らはカタギの人間では無い。マフィアや強盗団の様な犯罪者集団だ。

「デ、誰がどう行く？　コんな大人数で動けばバレんぞ？」
「アンダースタンドで～す。まずは２人、様子見にコロシアムに放ってありま～す。アワープランの妨げになりそうなストロングマンに張り付けるようにしてありま～す」

奥の方でドッカリとコンテナに座っていた大男がグフフ、と笑う。

「サぁ、ざっと6年ぶりに行動を再開しようじゃないか。我らが“凶星の爪(クロウスターズ)”よ！」

TO BE CONTINUED

第8話：決着、そして（後書き）

キョウ「全員無事に突破した予戦。次は第一回戦だ」

モトコ「負けないよぉ！」

エミル「こっちだって！」

リョウイチ「気負い過ぎて空回るなよ？」

マルタ「それはこっちのセリフだよ！」

エリス「次回、ポケットモンスターＡＤＶＡＮＣＥＭＥＮＴ『第９話：１回戦を突破せよ！【エミル＆マルタ編】』！」

キョウ「次回もポケモン、ゲットだぜ」

ハリテヤマ『ハァリテェ！』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1392t/

ポケットモンスター　ＡＤＶＥＮＣＥＭＥＮＴ

2011年11月25日12時48分発行